薩摩という国

崎元　雄厚

目　次

1　はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
2　日本文化の概説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
3　南方系文化　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
4　照葉樹林文化　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
5　歌垣・夜這い　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
6　各藩の教育と薩摩藩の郷中教育　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
7　ボーイスカウトと郷中教育　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
8　薩摩人の性質、長所及び欠点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
9　生麦事件と薩英戦争で見せた薩摩人の気概　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
10　薩摩人の心意気　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
11　薩摩と中央政府　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11
12　パリ万博　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
13　ペリー以前にやってきたフランスの黒船　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
14　明治維新と薩摩　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
15　調所笑左衛門と浜崎太平次の活躍　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
16　薩摩人の評価　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16
17　なぜ薩摩は西南戦争後急速に衰退したか　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17
18　日の丸と島津斉彬　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19
19　麦飯男爵：高木兼寛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
20　議を言うな　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
21　酒とおなごでごわす　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
22　ソイ・ソース　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　21
23　シラスの下に先隼人族遺跡？　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　21
24　日新公と「いろは歌」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　21
25　薩摩堤防と木曽川工事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22
26　焼酎「大警視」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22
27　薩摩藩士の対決　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　26
28　小松帯刀の跡目養子とお千賀との結婚　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　27
29　小松帯刀とお琴の純愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　28
30　西郷と愛加那　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　28
31　西郷どんの逸話　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　29
32　薩摩切子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30
33　一寸御免　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30
34　Ｓａｔｓｕｍａなる語は　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30

《はじめに》

玉竜を卒業と同時に薩摩を離れて半世紀余が過ぎたが、薩摩人であることを誇りに思っている。誠実、明るい、てげてげ、嘘をつかない、足るを知る、心を開く、性善説の信奉者、攻撃には強いが守備に弱い、質実剛健などの薩摩人気質が、源日本人と日本文化の良いところを今に伝えているように思える。

昨今の社会情勢を見ると、やたらに利己的な生き方に走り、かつて日本民族が大切にした公の精神と日本の良さはどこに行ったのであろうか。以前誰もが持っていた日本人の誇りと心棒はどこに消えてしまったのか。

我々が享受している豊かで平和な生活は、先人達の血の滲むような努力と、伝統的に教え込まれた徳育教育によるところが大きい。明治維新における薩摩の下級士族の活躍等、近代国家建設で見せた志士たちの尽力なくしては今日の日本の繁栄はありえない。我々が物質的にも精神的にも恵まれた日々を送ることができることに深く感謝しつつ、先人達の築いてくれた遺産を後輩達に繋いでいかねばならない。

一国平和主義という蛸壺生活で一人ぬくぬくと我が世を楽しんでいる日本。近隣諸国の恫喝に振り回され、馬鹿にされているのも分からない日本。明治時代の日本は貧しかったが、独立自尊、自助努力の精神に燃え、独り立ちできて外国からも尊敬されていたのに。

日本固有の文化に誇りを持ち、かつての日本人が持って気概、自立心、自信を取り戻そう。

我々を育ててくれた薩摩の文化、風習、歴史を振り返って三十四項目に分け薩摩に関係する話題をまとめた。

《日本文化の概説》

日本文化には英国と同様にさまざまな外来文化が積層している。異なった文化が縦糸、横糸となり日本文化を織り成しているとも言える。日本の文化の基層は縄文文化で代表される南方的要素とそれに近い照葉樹林文化的要素、さらに弥生文化で代表される氏族制・家父長制・血統を重んじる北方的要素が重層し、地域によって様々な濃淡がある。

それらは地域的に大別すると、中部地方ないしは関東地方を以って東西に分かれる。方言、味、もちの形、イロリとカマド、など生活に関する基本的要素も見事東西に分かれている。黒潮の洗う九州、四国、紀伊半島には、若衆組、歌垣（ウタガキ、カガイ）という南方文化が色濃く残っている。

《南方系文化》

薩摩は南方系の血筋と文化・風俗を色濃く受け継いでいる。インドネシア・マーレシア、メラネシア等に住んでいた人達、特にインドネシア・マーレシア系が高度の航海術をもって波状的に北上したり、あるいは漁民が海流に流され、フィリピン、台湾、琉球、九州に漂着し、縄文文化の源流たる南方系、照葉樹林系文化をもたらしたものであろう。日本のことをヤポネシアと称した島尾敏雄の指摘は的を射ている。

古代大和朝廷に仕えた隼人族の楯や刺青の風習、遺伝子の類似性、思考・行動様式や人々の性格、対人関係などからしても、薩摩人にはこれらの地域の文化の特徴が濃く流れていることは否定できない。

第二次大戦時負け戦の悪条件にも拘らず最後まで士気を失わず勇敢に戦った台湾の高砂族、マラッカ海峡で海賊活動を繰り返しているマレー・インドネシア族、室町時代から安土桃山時代にかけて東シナ海を荒らし回った倭寇には、隼人族というかジャポネシアと同系統の人種の姿が思い起される。

《照葉樹林文化》

照葉樹林帯は、カシ、ナラ、クス、ツバキなど表面に光沢のある葉を持つ常緑樹より構成され、ネパール・ブータン・ビルマ・雲南省などの中国南部・朝鮮南部・西部日本とほぼ東西に帯状に分布する。この帯には共通した生活文化があり、元鹿児島大の中尾佐助助教授はそれに照葉樹林文化と名付けている。

食べ物では、イモ類、モチ種（モチ、チマキ、オコワ）、納豆・味噌、豆腐、ナレズシ、こんにゃくなどがある。また、ウルシ、羽衣伝説、花咲爺、サルカニ合戦などの説話、死者の魂は山に帰っていくという山上他界の観念、正月にモチとサトイモを供える風習、歌垣、焼畑農業なども共通している。これらの特徴の多くは東南アジアの生活・風習、すなわち南方系文化と共通するものが多い。

《歌垣・夜這い》

歌垣は風土記、万葉集にも記されている古くからある習慣で、日本では若者衆とか夜這いと言われるものに相当する。それは満月の夜若い男女が山や丘に登り、歌や踊りを楽しみ、結婚相手を見つける行事である。

広辞苑によれば、「日本でも上代男女が山や市などに集まって互いに歌を詠み交わし舞踏して遊んだ行事で、かつ一種の求婚方式でもあり、性的解放が行われた」、とある。チョンガの若い男達は共同生活、あるいは寝泊りは別としても共同活動をするケースが多い。

この若者衆の風習が昭和三十年代前半まで残っていた熊野の例では、夜中家に鍵を掛けることは厳禁で、若者が夜這いの帰りに空腹を感じたらどこの家の台所に入り込んで飯を食べても自由で、若者のため米櫃には一食分食べ残すことが村の不文律であったそうである。熊野ではチョンガの若者衆は専用の建物（若衆宿）で、それがない地域は持ち回りで若者達が集まって学習や研修に励んだ。

司馬遼太郎によれば、「若衆宿には決して卑猥な雰囲気はなく、夜這いも古格な

ものであり、やみくもなものでなく、好きな娘のもとに通うわけで、真面目なものかどうかは若衆頭その他がよく監督している。もっとも、人気のある娘の場合、複数の若衆が通うことになるという点には若衆宿は寛容だったらしい。

娘が妊娠した場合、父親が誰だということになると、娘に父親の任命権があり、娘は複数の若者の中から自分の好みにあう若者を指名した。この場合、若者には拒否権はない。生まれてきた子が自分の子でない可能性が百もあるのだが、太古以来黙契があり、父親が誰であってもその子供は村の共同体の子であるとした。これは母系性の思想のせいであろう。」

夜這いの民俗学的研究を行った赤松啓介に寄れば、戦前中国地方の田舎では若者衆に限らずあらゆる年齢の男女が性の解放を楽しんだそうである。

この若者衆、夜這いの風習は明治時代まで日本各地の農漁村に広く残っていた。民俗学者の宮本常一の聞き取りでは、西日本では約半分の娘が夜這いを経験していたという結果が出ている。

沖縄の西表島では現在でもこの風習は残っているという。一般的に夜這いは青年男子が娘のところに押しかけることであるが、愛媛県南部、広島県北部、丹波地方、房総館山などでは女の夜這いの風習があったと伝えられており「丹波よいとこ女の夜這い・・」と言う唄が残っているそうである。

西南戦争で薩摩軍が鹿児島へ撤退するに当たり、官軍の構える可愛岳を突破することになった。薩摩軍は真夜中道なき道を、断崖を越え木根や岩をつかみ前進した。

大西郷は琉球列島に島流しされていた時、キンタマを風土病の象皮病にやられ肥大し、歩行が困難であった。それで西郷は籠で移動していたが、難所では籠から降りてごそごそ這って行かねばならなかった。「がっつい、よべ（夜這い）んごつじゃなあー」＊と言ったので、周りの兵士達がどっと笑い、張り詰めていた緊張感がほぐれたとの逸話が残っている。

古来から郷中教育を含めた薩摩社会の基層文化は南方古俗の若者衆、歌垣の風習を色濃く受け継いでいることが明らかである。ただし、士族には夜這の風習は継続されていない。

薩摩にあった「ひえもんとり」という習俗は、南方原住民が「敵の勇者の肉を食べパワーを貰う」という所謂「人食い」、「首狩り」の名残りであろう。

薩摩の場合、武士としての胆力を練る、肝試しの要素を兼ねて、罪人が「打ち首」の刑を受けて執行されると同時に若い侍たちが激しく競って肝臓を取り出し、生のままあるいは陰干しにして薬として食べた。参加者は足軽以下のごく低い身分の者で、競争者は互いを殺傷しないように刃物の携行は許されず、唯一の武器は歯と手をはじめとする自分の肉体のみであった。戊辰戦争や西南戦争でも肝取りが行われたと言われている。西南戦争において勇猛果敢で名を成し鬼大隊長を務めた逸見十郎太は、この生き肝取りで名を馳せ、久光の上洛に際して随行する護衛隊六隊のうちの一隊百二十名の隊長に大抜擢され出世の機会を得ている。

「首狩り」等の習俗は、台湾、フィリッピン、インドネシア、フィジー、パプア・ニューギニア等には戦前、一部では一九八〇年代まで残っており、米国大財閥のロックフェラーの御曹司はパプア・ニューギニアでこの習俗の犠牲になっている。

＊・・・「ほんとうに夜這いをしているようだねえー」

《各藩の教育と薩摩藩の郷中教育》

幕末における日本の識字率の平均は、男で六〇％、女で三〇％程度と見積られている。京都、滋賀では男で八〇～九〇％、女で五〇％程度の高いレベルに達している。然るに明治二十年頃の鹿児島の識字率は男で三〇％、女で五％であり、全国平均より大幅に低い。

青屋昌興の「薩摩史談」によれば薩摩藩の藩校、寺小屋の数は極端に少ない。幕末全国の藩校は二百五十校、寺小屋は一万～一万六千校あったと言われている。

鹿児島の場合、士族の教育機関として藩校（造士館）一校、郷校八校、一般庶民を対象とした寺小屋は僅か二十校しかない。二十校のうち、坊の津に八校、川辺町平山に五校所在している。坊の津は貿易港で先進的気風と蓄財があり、川辺町は米どころで経済的に恵まれていたので寺小屋が多く存在したのであろう。

寺小屋の多い県は、長野千三百四十一校、山口千三百四校、少ない県は鹿児島、宮崎等であった。明治二十二年当時でも鹿児島の修学児童の割合、郵便物、新聞、雑誌の講読は全国最低位であったことからも、教育が非常に遅れていたことは紛れもない事実であろう。

別の資料によれば、薩摩には私塾は一校しかない。私塾の多いのは岡山で百四十四校、次いで長野が百二十五校、少ないのは和歌山三校、鹿児島一校、北海道〇校である。従って薩摩には、京都の明倫舎（石門心学の手島堵庵）、日田の咸宣園（広瀬淡窓）、大阪の適塾（緒方洪庵）と懐徳堂（大阪町人出資）のような諸国の人々を受け入れ　五、レベルの高い教育を施した私塾はなかった。

薩摩で学校が極端に少ないのは、藩の財政が厳しくて学校を建てる余裕のなかったことが最大の原因であろう。士族が教育を受けられる学問所（郷校）は僅か八校しかなく、郷中教育が学問所の代わりを務めている。藩は庶民に対しては「依らしむべし、知らしむべからず」の愚民政策を取っていた。

寺小屋はお上に依存することなく庶民が自発的に開設していたものであるが、貧しくてそこまで手が回らなかったのである。薩摩には、京都の明倫舎（石門心学の手島堵庵）、日田の咸宣園（広瀬淡窓）、大阪の適塾（緒方洪庵）と懐徳堂（大阪町人出資）、萩の松下村塾（吉田松陰）のような私塾はなかった。

磯田道史の「歴史の読み解き方」を参考に、明治維新に活躍した薩摩藩、長州藩、会津藩、鍋島藩の士族教育を見てみよう。

薩摩藩を除いて、殆どの藩は高度の教育を大変重視した。一七五〇年以降肥後藩が学校で人材を養成し富国強兵を図るという方策を立て、それを会津藩、鍋島藩が取り入れ、やがて日本各地に広がっていった。学校の成績を人材登用の鍵とした。

この方法は追いつき追い越せのモデルを目標にする時は、紋切り型の優秀な実務官僚の養成に抜群の効率を発揮した。別の見方をすれば、記憶優先の教育のため同じ鋳型の優等生を効率よく生み出すが、自分の頭で判断したり、物事を鳥瞰的に大局的に見たり、不屈の精神と気力で難事に立ち向かうと言うような覇気ある人間を埋没させてしまう弱点を持つ教育法であった。

長州の学問好きと理屈つぽさの素地は、大陸に近く中世以前から漢書の輸入が盛んであり、書物に触れる機会も多くその中で培われたものであろう。長州人の識字率は、士族、町民･農民を問わず薩摩より遥かに高かった。多くの秀才が出て倫理、道徳と大義名分を振り回し、教条的な思考が体制を占めていたが、高杉晋作、木戸考允、大村益次郎等の高度の判断や自由な発想の出来る人間が出てくると現実を直視し、柔軟的に対応できるようになった。

当初長州藩は薩摩などに先行して尊皇攘夷の動きがあったが、観念論の影響が強く多くの犠牲者を出している。国事に火の玉となって取り組んだ情熱と行動力は賞賛に値する。長州からは、行動派の高杉晋作や久坂玄端、合理主義の大村益次郎、爽やかな武士の見本ともいうべき国司信濃等の人物が出ている。

会津藩は、第二代将軍徳川秀忠の庶子である保科正之という真面目な教養人で人格も伴った殿様を祖とした。保科は人の道、倫理を大変重要視し、教育と統治を藩の根幹的思想とした。

会津では身分毎に細かく行動規範と道徳律が「形」として規定され、子供の時からそれに従うように教育された。学校は会津藩の意向に合う人間を選別し官吏として採用する機関とされた。外見、服装で身分も区別された。これらの制度は徹底したもので、教育効率は抜群に良かった。高い教養、士気、道徳を誇る立派な会津武士を多数輩出したが、その反面鋳型にはめた教育なので、融通が利かず自主判断に乏しく思考停止になりかねない面が増長されることになった。

会津藩の「辺教育」と薩摩藩の「郷中教育」は少年期、青年期に居住する町内で集団教育を行い、一見したところ類似しているように見えるが、中身は対極にあったといっても良い。会津藩からは、山川浩・山川健次郎･山川(大山)捨松の兄弟姉妹、柴五郎を輩出している。

鍋島藩は鋳型にはめた朱子学の教育を行い、会津藩と同様に視野の狭い柔軟性に欠ける紋切り型の優等生を生み出した。覇気と個性があり自分の頭で考え行動できる人材は育ち難い教育であった。年令相応の学業成績を達成できなかった藩士は、俸禄の八〇％が削減された。

「武士道と言ふは死ぬ事と見付けたり」の文言で有名な佐賀の「葉隠」では、「釈迦も孔子も楠木正成も武田信玄も要らない。鍋島家に奉公したことがない人だから、家風にあわない。ただ御家のために命を捨てればよい」と説かれていることをもって、どのような教育がなされたか想像がつくというものだ。しかし硬直した環境に拘らず、久米邦武、大隈重信、佐野常民、江藤新平などの視野が広く応用のきく優秀な人材が出ている。

薩摩藩は藩校が少なく、郷中教育が藩校の代わりを果した。それは今の教育や幕末の各地の藩校の教育とは全く違うものであり、近代日本をつくる原動力となった多数の優秀な人材を養成した。

この教育の根源は南方の習俗である若者衆の要素を強く受け継いでおり、若者達に発言する機会を与え、青年の教育に大きな成果をもたらした。換言すれば、郷中教育は学校を建てる余力のない薩摩藩の貧乏財政と若者衆文化の産物であったといえる。しかし、西南戦争では郷中教育の悪い面が出た。

郷中教育の特色は、地域毎に自主的に実践される集団教育で、自分達で教室を捜し、リーダーも互選で選ぶ「教師なき教育」である。年長者が年少者を指導し、年少者は年長者を敬い、同年者は互いに助け合う。理論より実践を重視し、集団の中で「学びつつ教え、教えつつ学ぶ」教育であった。

本教育は、地区毎に固まりがちで、団体行動に際しては効率よく機能したが、その人によっては後述する「詮議」による訓練にも拘わらず、個人の判断力、独創性、積極性を削ぎ没個性的人材を生むという傾向がないとはいえなかった。しかし、リーダーの資質を有する若者に対しては、周囲が協力してその長所を伸ばすように配慮した。さらに、その様な優秀な者には造士館や開成所で高度の教育が行われ、郷中教育の欠点を補った。これら三機関は相互補完的であった。

造士館は、小学校から大学まで一緒にしたような一貫した教育体系を持ち、実学を重視したエリート養成機関であり、日本の技術大国化の礎になった。

開成所は英語学を中心に、物理、化学、数学、兵学等を教えた。幕府に内密で英国に留学させた薩摩藩英国留学生十五名の大部分は開成所の学生であった。

薩摩藩の下級士族を中心として創設された「私学校」は、銃隊,砲隊と、士官養成を目指した幼年学校より構成され、これは郷中教育の延長線と言うより郷中そのものであるといわれている。

郷中教育は四百年の歴史があり、城下士、郷士を問わず地域に分けて、六、七～十才（小稚児 こちご）、十一～十四、十五才（長稚児 おせちご）、十四、十五

～二十四、二十五才（二才 にせ）、二十四、二十五才以上（長老 おせ）の青少年が年齢別に自治、修養組織を編成し、互いに切磋琢磨した薩摩独特の教育制度である。

「負けるな、嘘をいうな、弱い者をいじめるな」の薩摩の掟を徹底的に訓えた。「負けるな」というのは、「己に負けない勇気を持て」ということである。家の格の上下はあっても、郷中教育の下では平等であった。

また郷中には高い自治権と権威が賦与され、身分に関係なく選出されたリーダーたる郷中頭が、公的に人に会う時には、家老といえども紋付袴姿で郷中頭を迎えならなければならなかった。その場合、家老と郷中頭は対等の立場にあり、発言権も同じであった。

HP「郷中教育」から引用して郷中教育の平日の日課を述べる。六時から朝飯迄では各々好きな二才の家に行き四書五経の素読、講義などを習い、朝食後十時までは馬場（広場）や神社で相撲などで体を鍛える。雨天の場合は大名カルタなどで遊ぶ。

十～十二時は朝の勉強の復習をする。この時長稚児が小稚児を指導する。昼食後十六時までは山あそび、川あそび、駆けっこなどの各種のあそびで体を鍛える。

十六～十八時は武芸の稽古をする。このように、小稚児、長稚児は朝から十八時までは同じ科目を習った。小稚児は十八時以降外出禁止となるが、長稚児は時には二才から日頃の生活態度などの指導を受け、二十時には帰宅する。

二才は六～八時は小稚児、長稚児への講義や指導。十～十四時、役職についている者は藩庁で仕事をする。役籍がないものは藩の学校その他で勉強する。

十六～十八時は武芸の稽古。十八～二十時は詮議で武士としての心得について討議しあるいは夜話をして二十時に解散する。武芸は剣術が主で、上士は東郷示現流を、下士は薬丸自顕流を選ぶ傾向があった。

幕末の薩摩藩には三十三の郷中があり、そのうち最も有名なものは加治屋町郷中で、西郷隆盛、大久保利通、西郷従道、大山巌、山本権兵衛、東郷平八郎、村田新八等の逸材を輩出した。それは七十余軒の下級武士で構成され、その総面積は僅か二百ｍ四方、一万余坪で、一軒当たり平均百五十坪程度であった。

郷中頭は西郷隆盛であり、稚児から二才に至る青少年の読み書き教育、詮議、若者行事である肝試し、相撲、大将倒し、旗奪り、妙円寺詣り等は全て彼が取り仕切った。西郷はこの組織と団員と共に国造りに邁進し、世紀の「旗奪り」に成功した。

学問は中学校レベルの教育でよしとされ、学問より心の爽やかさ、潔さ、勇敢さ、弱者へのいたわりの三徳目の涵養を第一とした。臆病、卑怯を最も卑しんだ。薩摩の重視した教育と徳目は単純明快であった。

郷中教育では学問も教えたが、それより徳育、訓育、体力づくりや以下に述べる「詮議」が中心の科目であった。この「詮議」は知識の詰め込みではなく、事に際して合理的判断を下して、どう対処するかという事を鍛える郷中教育特有の討議訓練であった。

それは起こり得るが簡単には解決策が見つからないような様々なテーマに対して、その場で全員が納得し、意見が一致するまで徹底的に意見を述べ合い答えを出す方法で、昨今のビジネス・スクールでの訓練を先取りしたようなやり方である。現代風に言えば、ディベートやグループ・ディスカッションであり、ケース・スタディとも言うことが出来る。

薩摩士族は全員この「詮議」という問答形式の討論で徹底的に鍛えられたので、武士としての実践的な判断力が養成された。これは日本人が不得手とする分析、判断、合理的かつ戦略的思考を養うことに貢献した。その成果として幕末薩摩藩は無駄の無い政治的判断を下すことが出来た。

言葉の問題もあるが、ディベートの文化が殆ど無い日本は、国際会議では沈黙を守り、不利な立場に立っている。この「詮議」による事象を合理的に分析判断し戦略的思考力を涵養すると同時に、討議しながら自分の意見を発表して相手を納得させることは、現在日本で最も必要とされているものである。

郷中教育は教えの道を一歩誤れば、ギリシャのスパルタ、トルコのイエニチェリ、イスラム諸国の原理主義、一部の過激な武士道と同じ偏狭な愛国主義に、あるいは殺人マシーンになり兼ねない要素を孕んでいた。

しかし本教育は、一言で言えば堂々とした心爽やかな男をつくる教育であり、総じてうまく機能した。窮屈な点が無くはないが、全体として見れば教育の本質を抑えていた。

郷中教育では貧乏のため専用の校舎もなく、専門の教師はいないという無いない尽くしの環境下で、自分達でリーダーを選び学校を運営し、先輩が後輩を指導し、自助努力と自分の頭で考える事を重んじ、又議論を尽くして出された結論には「議を言わず」に従うという人間の心棒となる心の教育を行った。

「いざ鎌倉」の際、真っ先に飛び出す気概、西欧のいう「ノブレス・オブリージュ」の精神もしかっりと養われた。これは徳川体制の初期禅僧鈴木正三や末期の石門心学の石田梅岩の教えにも通じる人間形成の教えであった。そのため事に当たって、心がぐらつかず合理的な処置を取ることが出来た。

郷中教育は国内各藩の士族教育はおろか世界的に例を見ない独特の教育であった。強いて言えば、英国のパブリック・スクールの教育方針と通じるものがあるように思われる。

「薩摩の大提灯」なる語がある。薩摩人は自分で判断することなく大人物に従うという意味である。これは一面の真理であろう。西郷隆盛のイメージが強すぎて強調され過ぎの感がなくもない。道なき道を開拓し、あるいは地図なき荒海に

敢然と挑戦した下記の人物達の生き様を見ると「薩摩の大提灯」なる語とは別の薩摩人の姿が浮かぶであろう：不平等条約改定に尽力した初代外務大臣寺島宗則、殖産興業の五大友厚、日清・日露を勝利に導き植民地化を防いだ西郷従道、大山巌、山本権兵衛、東郷平八郎等の軍人達、それほど名は知られていないが北海道開拓庁で活躍した村橋久成、前田正名、薩英戦争の談判で堂々とした薩摩の主張で英国公使を唸らせたせた重野安繹・・・等など。

最後に「棒倒し」の由来について一言。郷中教育では体力、気力の涵養のため、相撲、降参いわせ、大将倒し、旗奪り、剣術等の荒っぽい運動に精力的に取り組んだ。

海軍兵学校、防衛大の名物行事である肉弾戦の「棒倒し」の原点は薩摩生まれの「大将倒し」である。「大将倒し」は人垣で守られた敵将を早く倒した方が勝ちという荒っぽい遊びであるが、大将役の怪我の危険性が高いので大将の代わりに棒で代用させた。それでも余りの激しさに兵学校から停止命令が出されたことがある。

《ボーイスカウトと郷中教育》

乃木大将が明治天皇の名代で英国王ジョージ五世の戴冠式で英国を訪問した際、ボーイスカウトの訓練を見学した。創設者パウエル卿に“どのようにしてこの制度を創設されたのか”と聞いたところ、“お国の薩摩の郷中制度を研究し、良い点を取り入れ組織化した”といわれ、乃木大将が驚いたという話が残っている。

薩英戦争による英国の薩摩に対する評価の変化であろう。東郷平八郎や大山巌等日露戦争の指導者の多くが郷中教育で育っていることから、その教育に関心を持ち研究した成果であると思われる。

中国・朝鮮、ドイツなどの観念主義が行動の基礎になっているのとは違い、薩摩は英国と同様に現実主義といわれている。

英国のエリート教育機関であるパブリック・スクールは、学問は程ほどにして、スポーツを通して特に不屈の精神、リーダーの誇り、ノブレス・オブリジエ精神（上に立つものには大きな義務が伴う）、教養、徳育と常識等の涵養を重視したが、これらには郷中教育の教育方針と相通じ合うものが多く、両者は類似した価値観を共有し互いに親近感がなくもない。しかし、惜しむべきは薩摩には英国の「したたかさ」と「あくどさ」が見事な程欠けていることである。

日本には「沈黙は金、雄弁は銀」、現代のコマーシャル風に言えば「男は黙ってサッポロビール」の文化がある。日本の中でも薩摩は一層その傾向が強い。この地には古くから「げんねこちよ知らん」（恥ずかしさを知らん）という表現がある。薩摩では功を誇らず全てに控えめであることを美徳とし、言い訳は見苦しく、黙って死んでいくのをよしと称える習俗がある。

何事にも控えめであるということは、伝統的な日本人の礼儀作法の真髄であり国内では広く認められた価値観であるが、国際的には全く通用しない。「沈黙は金、雄弁は銀」は、「日本の常識は世界の非常識、世界の非常識は日本の常識」の類である。

これからの時代は益々国際交流が盛んにならざるを得ない。この国内で尊重される格言は、国際標準に完全に逆行している考え方である。

今後日本は郷中教育の「詮議」の長所を取り入れ、自分の意見を主張し、必要に応じて相手に妥協しながら相手を説き伏せるデイベート能力の涵養が必要である。国際社会では日本は外国を見習って、自己主張すべきときは堂々と自分の意見を述べ、諸外国の事も考えながら国益を守るべきである。

なお、ボーイスカウトは薩摩の郷中教育を参考にして英国で組織化されたという話は間違いであるという説もある。

《薩摩人の性質、長所及び短所》

薩摩人の特徴は、南方的そのものである。ポリネシア的人の良さ、深く考えない、人を疑わない、リーダーに無条件に従う、性善説の信奉者、足るを知る、穏やか、てげてげ、照れ屋（ゲンネ）、勇敢、弱者へのいたわり、言い訳をしない、皆で議論を尽くして決めたことには原則として反対しない（議を言わない）などである。

さらに、歴史学者がよく指摘する「領土欲が少ない」ということも薩摩の特徴かも知れない。また、伸びる可能性のある若者に対し、周囲が協力してその長所をのばすように心掛け、チャンスを与え、指導したというのも薩摩のやり方であった。これと同じ教育が英国でも行われていた。

一方、リーダー達は、情報収集に最大の努力を払い、いつも冷静に現状を直視して分析し現実的処置を講じてきた。さらに目先の戦術思考でなく、将来と全体を見通した戦略眼をもって物事に対処してきた。

薩摩には暗君なしといわれる優れた政治的判断力があったので、歴史的に見て極めて稀と言われる八百年も薩摩藩を維持できたのである。この南方的性質と、情報を非常に大切にし冷静に現実に対処する能力は、薩摩の特徴を表すコインの両面である。

薩摩人の美質は沢山あるが、二、三の例をあげると、維新後政府高官になった者が人材を登用するに当たって藩、門閥、出自、縁故関係にとらわれず、能力、人物本位でかなり公平な人選をしたことである。

これは身びいきの傾向が強く、閥を形成しがちであった他藩とは対照的であった。降参した敵、捕虜や弱者に対する寛大な扱いも薩摩の特徴である。他藩あるいは新政府軍は降参した敵や入院中の敵を簡単に殺すことがしばしば起こったが、薩摩が関係した戦争、例えば西南戦争や戊辰戦争でも、降参した敵や入院中

の敵には大変寛大で殺害することは殆どなかったといわれている。さらに、薩摩人は一般に金銭感覚が清廉であった。

薩摩人に対する悪口として、その行動は長州や肥後と反対に「薩摩の大提灯」と称され、リーダーの意向にひたすら従い、独立して判断し行動することが不得手で、主体性に乏しく体育系と言われてきた。

実際には自主性を持って前例の無い難関に挑み成果を上げた上～中級の薩摩人は少なくない。西郷、大久保の存在が大きすぎて「大提灯」なるイメージが形成されたものであろう。

薩摩には全国に通じるような文化や思想家に乏しい。それは国東半島の三浦梅園や明治維新のグランド・デザイナーの一人であった肥後の横井小楠などごく一部の人物を除いて、九州一円についても言えることである。これは自然に恵まれたヤポネシア的気候風土や、言い訳をせず理屈をこねず行動することを良しとする文化のせいでもあろう。

因みに、幕末にはお国柄を表す言葉として「薩摩の大提灯」、「長州の小提灯」、「肥後の鍬形」とか、あるいは人柄を表現する語として「薩摩っぽ」、「土佐っぽ」、「水戸っぽ」という言葉が使われていた。

「薩摩の大提灯」とは、薩摩人は西郷のような大提灯を持った大人物に先導され主体性がないということを表現している。「長州の小提灯」とは、長州人はクールで理屈っぽく議論好きであるが、各人が小さくても提灯をもって自主的に判断して行動するという意味である。「肥後の鍬形」とは、肥後人は一人ひとりが兜をかぶり大将気取りで、自己主張が強くて団結ができず、口先だけに終わりやすいという性質を指摘したものである。後三者の「＊＊っぽ」とは利害を考えず一本気で猪突猛進する様をいう。長州人は「長州っぽ」とは言われなかった。

明治維新で動輪の役目を果たした薩摩と長州の気質を一言で言えば、薩摩人は〝てげてげ〟（大雑把）であるが、長州人は理詰めでクールである。勝海舟は両者の違いを、著書「氷川清話」で次のように述べている。

“長人と薩人のヤリ口を一言でいえば、長人は天下を取るために金を稼ぐが、薩人は金を得るために天下を稼ぐという相違があるよ。ソレと、モ一つ、長人は死んだ後々の事までも誤解されぬように克明に遺言などを書くが、ソコに行くと薩人は至極アッサリしたもので、斬られ場に直っては一言も言わず、知己を千歳に待つという風があるのサ。吉田松陰や西郷隆盛など、良い対照だよ。”

幕末「長州人は金に弱いが、薩摩人は女によわい」ともいわれた。薩摩に寺田屋事件で上意打ちされた傑物に、意気軒昂で熱血漢の有馬新七という武士がいた。彼は志半ばで倒れたが、薩摩では長州人的思考法を持った唯一の男と言われている。

長州人は上述したような性向があるが、薩摩などに先行して一番槍に近い存在として多くの犠牲者にめげず、明治維新の突破口を切り開いた情熱と行動力は見上げたものである。

肥後藩からは横井小楠という明治の新国家建設をデザインした大型人物を生んでいる。藩内では生涯相手にされなかったが。

余談であるが、相手に斬り込むとき薩摩人は〝チュスト〟と叫ぶが、長州人は〝天誅〟と叫ぶそうである。これは子供のチャンバラごっこでも同じという。

《生麦事件と薩英戦争で見せた薩摩人の気概》

本事件は、一八六二年二月に久光公が孝明天皇の勅命を携えた大原重徳を江戸まで護衛し帰途についた際、神奈川の生麦村で発生した事件である。幕府は予め薩摩に帰路外国人と問題を起こさぬように、外交団には薩摩の行列が通過するので、出歩かないように通達を出していた。

約四百名よりなる久光公の行列が生麦村を通過中、護衛の制止にも拘わらず騎馬四人組の英国人が行列に接触したので、奈良原喜左衛門がリチャードソンを切り、海江田信義が「止め」を刺した。残り三人は刀傷を負いながらも逃げ失せた。

この少し前、米人が行列に遭い下馬脱帽して事なきを得ている。薩摩は幕府に下手人の足軽は逃亡したと届出た。幕府から事件解決まで滞留を要請されたが無視した。なお、海江田の実弟は、桜田門外で井伊直弼の首を切り落とした有村次左衛門であり、海江田の娘のテツは東郷平八郎の妻である。

久光は生麦事件の後薩摩への帰路上洛し、孝明天皇に拝謁した。天皇より勅使補佐の任に対しお言葉と太刀一振りを賜った。無位無官の身でこのような光栄に浴する事は極めて例外的であり、彼の名は天下に鳴り響いた。

リチャードソンは英国に帰国する直前に初めて横浜に立ち寄った。彼の友人が危険だから外出を控えるようにと忠告したが、上海における経験から東洋人を見下し、且つ彼等の扱いに自信を持っていたので忠告を聞く耳を持たなかった。

英国にいる叔父は、彼の性質からするとこのような事件に巻き込まれても仕方がなかった、と述べたそうである。米国の領事館員は、日本のしきたりを無視した英国人に非があると本国に報告している。

外国人は、「武士の情け」、「介錯」、「止め」の文化を理解できず、海江田信義が行った「止め」は、苦しんでいる人を残酷に殺した行為と大きな問題となった。

薩摩側は大名行列をかき乱したので、国内の慣例法に基づいて処置しただけと日本側に何ら落度は無いと判断していた。しかし、国際法に従えば諸外国は条約により治外法権（領事裁判権）を認められ、たとえ外国人が日本の法律を犯しても処罰する権利は放棄していたので、薩摩藩は無礼討ちすることはできなかったのである。

この治外法権、関税自主権の喪失、片務的最恵国待遇は、一八五八年に日米修好通商条約で締結された条項であり、米国に引き続いて西欧各国と締結された。これ等が世に言う不平等条約である。

日本人が現実的に条項の内容に気がついたとき既に遅く、西欧列強は一旦手に入れた既得権益を手放さなかった。この不平等条約改定のために、鹿鳴館での舞踏会の開催、明治憲法の制定、岩倉使節団の派遣などして日本政府は多大の努力と労力を払うことになった。

治外法権の改定に四十五年、関税自主権の改定に五十七年の長い年月を要した。これ等は日本側に国際経験と知識がなかったことや、日本人の特徴である性善説で相手国を信用しすぎたことによる。治外法権の場合、日本で裁判にかけるのは面倒であるとして、相手国が責任を持って裁判してくれるのは誠に有難いと幕府は諸手を挙げて賛成している。

英国は高輪にあった仮公使館で一八六一年に発生した英人殺傷事件（東禅寺事件）の直後から、日本人による外国人襲撃事件が続けば、関門海峡、大阪湾、江戸湾などを軍事封鎖して日本商船の廻船航路を封鎖する計画を検討していた。

また自国陸軍と協議して京都、大阪、江戸を占領する計画も検討したが、ゲリラ戦に持ち込まれたら不利になるとしてこの案は最終的に断念している。英国本土では、一八六三年に対日海上封鎖を含めた武力制裁に関する勅令が可決されていたのである。

生麦事件に関して英国は、幕府に対して英人殺害を放任し、犯人逮捕に何もしなかったとして十万ポンド（現在では約百九億円）の賠償金を要求した。この金額は最新鋭の蒸気船四隻に相当する法外なものであった。

英国はこれが受け入れなければ、かつ不満足な回答であれば、軍事行動をとると通告して、手始めに江戸湾を封鎖する作戦を計画し遂行中であった。

横浜には何時でも出港できるように多数の軍艦を待機させ、約千八百万円相当の水食糧をはじめとする軍事行動用の物質を調達中で、横浜港はその積み込みのため陸では大八車が、海では小船が行き交い混乱を極めていた。一八六三年五月に老中格の小笠原長行がその支払いに応じたため、この軍事行動は危機一髪で回避された。

英国は薩摩に「下手人を引渡し、英国官吏の面前で処刑すること（当初は下手人を引渡す代わりに島津久光の首級を差し出せと要求してきた）および遺族への賠償金二十五万ポンド（六・〇三万両、約二十七億円、一両=四・五万円として）の支払い」を要求していた。

この金額は薩摩藩年間予算の四十五％に達する膨大なものであった。それを拒否し続けたので、一八六三年六月二十七日（新暦八月十一日）ニール代理公使が、クーパー提督指揮下の二千四百トンの旗艦を含む七隻の艦隊を率いて薩摩にやってきて谷山沖に投錨した。艦隊を派遣して恫喝すれば、幕府や中国のように簡単に屈服すると考えてのことであった。藩では寺田屋事件に関係して謹慎処分中の精忠組の二十一名が謹慎を解かれ、総動員体制に入った。

翌二十八日軍奉行の折田平八、伊地知正治が藩の代表者として旗艦を訪問し、代理公使に「下手人は逃亡しここにはおいもはん。非は英国側にあり、薩摩藩は生麦事件に一切責任はあいもはん」と藩の見解を述べ、英国の要求を断固拒否した。公使は奉行に国書を渡し、「二十四時間以内に回答が無い場合は強硬手段を用いる」と伝えた。折田は英国側に鹿児島城内で交渉しようと上陸を促した。薩摩藩は代理公使と提督の一行を城内で皆殺しにし、あわよくば英艦を分捕ろうという計画だったのだ。

英国側は身の危険を察知し上陸しなかったので、久光は事件の当事者である奈良原喜左衛門と海江田信義を呼び寄せ、斬り込み隊を編成し敵艦に乗り込んで相手を殲滅し薩摩の武威を示せと命令を下した。

奈良原、海江田がリーダーになり、スイカ売りに変装した若者より成る決死隊を結成し、スイカ、野菜、鶏の下に脇差を隠し、十一隻の小船に分乗して敵艦に接近した。

大砲の合図と共に一斉に斬り込み、奈良原と海江田はニールと提督を刺し殺し、他の藩士は水兵を無視して士官のみを襲うことになっていたのだ。この決死隊は海江田信義、黒田清隆、大山巌、野津鎮雄、樺山資紀、西郷従道、伊東祐亨、仁礼景範等腕の立つ元気者の藩士七十七人より構成されていた。

大部分は英軍側に警戒され乗艦を拒まれたが、大山や黒田等ごく一部は英国軍の阻止にも拘わらず強引に乗艦した。艦上では多数の英国陸戦隊員が小銃に着剣し不測の事態備えて配備に付いていたが、斬込み隊は誰がどの相手を斬るか相談していた。

酒を飲んでいた黒田は、太鼓腹の英国水兵の腹を小突いてからかっていた。そこに、久光の撤退の命令を伝達する使者がやってきた。殆どの者が乗船できなかったので作戦は中止になったのである。「チェスト」の奇声と共に、彼等はスイカを切りまくって撤退したそうである。この作戦は失敗したが、敵艦への切り込みとは、いかにも天を衝かんばかりに気力溢れた当時の薩摩隼人達の勇気凛々たる姿を髣髴させる話ではないか。

英国艦隊は、薩摩が外国から購入した蒸気船三隻（約八万ポンド、約九十五億円相当、建造後一～三年の高性能商船）を失うと戦意を喪失すると考えて拿捕し曳航した。この時五代友厚、寺島宗則は捕虜になった。

交渉のテーブルに着かすために相手国の財産を一時的に取り押さえることは国際法上認められていたが、薩摩はこのルールを知らなかったのでこれを開戦と判断し、暴風雨の吹きすさぶ七月二日に戦端が開かれた。この戦争は薩摩では、「ま

えんはまんゆっさ」（前の浜の戦）と呼ばれている。
薩摩軍は軍歌で自らを鼓舞しつつ大砲を撃ち続け、貧弱な装備ながらよく戦った。

「エゲレスの軍艦が　薩摩ん海にきもしたげな
　隼人ん砲台一斉射撃　飯も食わずにチングラツ！」

武器の差は著しく、薩摩の大砲は青銅砲で、砲弾は鉄の塊の球形弾のほか榴弾も打ち出すことが出来たが、飛距離は最大一㎞であり、一発発射するのに五分という長い時間を要した。薩摩軍が砲弾を一発撃つ間に英軍は四発以上発射した。というのは薩摩軍の場合弾丸を発射する度に筒先から砲身を掃除し、火薬と弾丸を装填しなければならなかったからである。
英軍の大砲は鋼鉄製の砲身に螺旋条（ライフル）を刻み、弾頭には瞬発信管を装着した椎の実型炸裂弾を四㎞も飛ばす新式アームストロング砲であった。これは元込め式で、砲身を掃除する必要がなく速射性を有し、さらに螺旋条を施すことにより、従来の砲よりも飛躍的に高い命中率を獲得した英国海軍自慢の大砲であった。
砲弾の速度にも格段の差があり、薩摩軍の弾は目で追えるのに対し英軍のものは発射音と同時に着弾炸裂した。
大砲の数は、薩摩八十三門、英国艦隊百三門であった。砲台は鹿児島側が祇園之州(砲六門)、新波止(十一)、弁天波止(十四)、南波止(五)、大門口(八)、天保山(十一)、桜島側が袴腰(四)、鳥島(三)、沖の小島(大・五、小・十)、赤水(六)の十カ所に設置されていた。薩摩は総員一万三千五百人の陣容で英国艦隊を迎え撃った。このうち、一砲台に当たり四百五十～千人の兵士が配備された。
英国側の旗艦は応戦するのに二時間を要した。艦の弾薬庫の前と通路には幕府から受領した賠償金の千両箱二百余箱（十万ポンド相当）が山積みされていたので、台風で激しく揺れる船上でそれらを移動させる必要があったからである。
英国は過去の砲艦外交の経験から英国艦隊を見れば、薩摩はすぐ屈服すると判断して臨戦態勢を取っていなかったからである。

七月二日（新暦八月十五日）薩摩藩の先制砲撃により始まった戦闘は実質一日半で終わり、七月四日英国艦隊は引き上げた。というのは、英艦隊は実戦が想定になく十分な弾薬と食料を積んできていないため継戦が困難となったのである。
西郷従道、大山巌は弁天砲台で戦闘に参加したが、十七才の東郷平八郎は若いので砲弾運びをやらされた。東郷の母益子が砲煙をついで薩摩汁の入った鍋を片手に兵士を激励したという有名な逸話が残っている。
後の連合艦隊司令長官伊東祐亨は祇園之洲で戦っている。世界の海軍三人男の一人である山本権兵衛はその時十二才で東郷同様砲弾運びを手伝ったという。
驚くべきことには、あの時代に薩摩が機雷作戦を実行したことである。砲撃戦に勝る英国艦隊に対し青山愚痴（通称グチどん）が桜島と沖の小島間に三基の機雷を布設して待ち構えていたのである。

「薩摩の湾に異人の船が　来やつたとさあ
　グチどんの水雷で　チングラツ！」

英国艦隊が沖の小島の方向へ進路を向けたので、我が兵士達は軍歌の通り轟沈を期待して固唾を呑んで艦隊を見守った。しかし残念なことに、沖の小島の砲台が発砲したため英国艦隊は航路を変更してしまい、この作戦は空振りに終わってしまった。この機雷は斉彬が尚古集成館で製造させたものであった。
それは、地上より電気を用いて遠隔操作で爆発することになっていた。機雷は二百五十㎏の火薬を内蔵していたので、触雷すれば二千四百トンの木造の英国旗艦は一発で轟沈させた可能性がある。さすれば、また違った歴史を辿ったかもしれない。
薩摩の戦死者は五名、戦傷者は十三名であり、一方英国軍のそれは夫々十三名、五十名で、戦死者には、旗艦の艦長、副長が含まれていた。薩摩は死傷者の数こそ少なかったが百万ポンド（二百五十万両、当時米一石＝二両）相当の被害を受けた。蒸気船三隻、民間船五隻と上町を中心とする市街の一割（民家三百五十、藩士屋敷百六十軒）、さらに尚古集成館工場群を焼失した。
集成館は、当時約千二百人が働いていた日本の最先端最大の近代工場群で、反射炉、溶鉱炉、硝子製造所、火薬製造所、造船所を運営していた。このほか、ライフル銃、大砲、機雷、工作機（大砲の孔をくり貫く機械）、陶磁器、綿、氷白砂糖、硫酸・硝酸・塩酸、樟脳、はぜ、農機具、刀剣、和欧活字製造なども行っていた。さらに電信機や写真術も研究していた。
上町の被害が大きかったのは、砲弾、ロケット弾が住民の住まいのほか大量の硫黄を貯蔵している倉庫に命中したこと、暴風雨で木造家屋が次々に延焼したこと、藩の退避命令により消火する人がいなかったことなどによる。一方、この退避命令のため住民の死傷者は極めて少なくてすんだ。
袴腰砲台から突然砲撃を受けた一隻の軍艦は錨を断ち切って現場を逃れた。後日薩摩はその錨を引き揚げた。海軍にとって錨を敵に取られるということは陸軍における軍旗を奪取されることに等しく、はなはだ不名誉なことである。和平後薩摩は自ら申し出てその錨を友好の印として英軍に返還している。

この戦に対し英国議会と国際世論は、戦争前に多額の賠償金を得ていたにも拘わらず鹿児島の民家を砲撃したことはやりすぎとしてクーパー提督を非難した。ビクトリア女王も議会で民家の砲撃に対し遺憾の意を表明している。
朝廷は薩摩藩の行為を攘夷の実践として島津父子に褒賞を贈った。薩摩はこの戦争で世界との実力の差をはっきり認識し、攘夷が実行不可能であることを認めた。

薩摩は、支藩の佐土原藩を仲裁に立て岩下方平、重野安繹（厚之丞）、大久保利通等が横浜の英国公使館で和平交渉を行った。

談判の中心人物は三十七歳の重野である。西欧相手の交渉で卑屈な態度を見せることは最悪の事態を招くことになりかねないが、重野は薩摩藩の代表としてアングロ・サクソン風に堂々と薩摩側の意見を主張した。

彼は大名の行列を乱すことは国内慣例法で無礼討ちが認められているのでそれを犯した英国人に罪がある、八万ポンド相当の高価な蒸気船三隻を拿捕したので開戦するに至ったがそれを弁償しろ、と一方的に英国の非を攻め立て続けた。

英国側が日英条約に基づいた正当な権利を主張し始めるとそれをはぐらかし、ニール代理公使では話がつかない、英国に行ってビクトリア女王と直接談判すると相手を手玉に取った強気の交渉を行った。

双方に歩み寄る雰囲気を掴むと、厚かましくも両国和平親善のためとして軍艦や武器の購入の斡旋、技術者の派遣や留学生の受け入れを求めた。武力と恫喝で相手を屈服し続けてきた英国に敢然と立ち向かった重野に、代理公使は度肝を抜かれたことであろう。

ニールは薩英戦争で薩摩が示した実力、気骨、進取の気風と大英帝国を相手に一歩も引かない堂々たる態度で談判した重野に「ノブレス・オブリージェ」の精神やジョンブル魂に通じるものを感じたのであろう。対等の立場で談判に臨んできた薩摩藩の毅然たる態度に軟化して和平が成立することになり、薩摩は賠償金を払い生麦事件の犯人の逮捕と処刑を約束した。

慰謝料について、謝罪の意味合いの少ない家族養育料という名目で支払うことにした。しかも、慰謝料は幕府に払わせようとして、大久保が老中板倉勝静と交渉した。老中が金は貸せないと断ったところ、「それならやむを得ない。英国公使を斬り、切腹する」と脅した。

幕府はこの気迫に負けて七万両を貸すことになった。しかし薩摩は、幕府から借りて支払った賠償金を幕府に払い戻すことなく踏み倒した。犯人は「逃亡中」とされたままで逮捕されず、奈良原喜左衛門は県知事、海江田信義は枢密顧問官となり生涯を終えた。

なお英国との交渉では、賠償金の支払いの条件として、大胆にも軍艦購入の斡旋を要請し、英国はそれに応じた。

この戦いを機に薩摩と英国は急接近し、パークス公使は招待を受けてキング提督の指揮する三隻の軍艦を引き連れて七日間に亘り薩摩を訪問した。南日本新聞によれば、公使一行の賓客は二十三人で、その中には薩摩と関係の深い英国商人であるグラバーも含まれていた。

殆どの薩摩人は外国人を見たことがなかったので、鹿児島市の石燈籠（いずろ）に上陸した時には数千人の見物人が押し寄せ、身動きも取れないほどであった。

二日目磯の仙厳園で接待したときの料理は日本料理で、吸い物十三種、二の膳、三の膳合わせて四十五種の品数に及んでいる。軍艦の乗組員の分を含めて鶏三千匹、卵五万個、豚三十頭を消費している。

英国側は尚古集成館で薩摩切子の見事さに感嘆の声を上げている。磯の山奥では一行を狩猟でもてなし、鹿七頭、猪四頭を仕留めている。接待費は三万両に達したが、薩摩は藩の一年間の財源が十三万両のであることを考えれば、如何に大金をはたいて英国一行を盛大にもてなしたかが分る。

この戦で極めて大きな教訓を得た薩摩は、その後最新の機械、武器、艦船を輸入して、優秀な若者を幕府に秘密裏に留学に送り出すなど英国に急接近を図った。英国側も薩摩に対する認識を新たにし、外交の軸足を幕府から薩摩に移し変え始めた。

見事な交渉を行った重野は、その後外交官や政治家への道を薦められたが断り、薩摩藩の造士館の先生を経て東大の国史学教授となり、日本で最初の文学博士となった。また、本邦で最初に実証主義を提唱した歴史家と言われている。

この薩英戦争がなければ、外国勢は恫喝すれば日本は折れるとの認識をいよいよ強く確信して植民地化に乗り出したかもしれない。

この戦争における薩摩の堂々たる態度と義和団事件（中国で起こった帝国主義反対運動）で見せた柴五郎中佐の見事な指揮振りと日本軍の規律が、その後英国が日本を日英同盟の締結に値する相手と判断したことは確実であろう。

日英同盟がなければ、日本が日露戦争で勝利することは困難であったろう。薩摩が薩英戦争で見せた日本人の気概がなければ、日本は他の植民地にされた国々のような悲惨な歴史を辿ったことであろう。

近隣諸国の恫喝に右往左往する政府指導者よ、この薩摩の骨太の心意気と堂々とした対応を見習ってほしい。

《薩摩人の心意気》

薩摩では、おおらかさ、爽やかさが徳目の一つであった。強敵には尊敬を払い、降参した敵、捕虜や弱者に対する寛大な扱いもそのひとつである。

五稜郭の戦いで、黒田清隆が榎本武揚の助命に奔走した時のことを述べる。黒田が榎本に降伏を薦めたが、徹底抗戦と拒否。榎本は、これからの日本になくてはならぬものとの思いで、且つ、戦火による消失を恐れて、己がオランダで学び宝物としていた貴重な国際法の書物を黒田に贈呈した。

その後も降伏勧告を続けたが拒否。黒田は貴重な書物の寄贈に感謝すると同時に幕軍の戦いを賞賛し、五稜郭内に立て篭もっている榎本軍にマグロ五匹と酒五樽を贈った。

さらに、必要あれば食糧、薬、弾薬も届けると伝えると同時に、包囲網の一部

に逃げ道をつくらせた。幕軍兵士はそれまで敗者、投降兵に対する官軍の恐ろしい処罰のことを聞かされ、投降に踏み切れずにいた。彼等は、函館病院での負傷者に対する薩摩軍の寛大な処置を耳にし、さらに今回の酒樽の差し入れを知り、一挙に戦意を喪失して逃亡兵続出となり、五稜郭は陥落した。榎本は切腹しようとしたが部下に取り押さえられ失敗した。

黒田は榎本の能力を高く評価し、彼を新生日本に是非必要な人材と思い、助命運動に乗り出した。それはいかにも薩摩に相応しい逸話として伝えられている。

薩摩の教えでは、「互いの仕切りの中で死力を尽くして戦うのはいくさ人の定め。勝敗は時の運。降伏すれば敵も見方もなし」である。殆ど全ての新政府首脳は榎本を死刑にすべきとの意見であった。

黒田は長州の木戸には、「榎本を死罪にすれば、国家の大損失。彼を死刑にするなら坊主になる」と言い、本当に頭を丸めてしまった。黒田の坊主頭の写真はこの時のものである。

岩倉具視には、「死刑にすれば、薩摩と長州は敵対状態になる」、三条実美には、「天皇の人徳に感じ入って降伏したのに処刑したら、新政府は皇室をないがしろにしていると公表するようなものだ」とそれぞれに説得して回った。榎本は幕臣の意地と誇りをもって黒田の尽力に応え、その後ロシア大使、海軍卿の重責を担い立派に務めを果した。

会津と共に幕府体制に最も忠実な庄内藩は、江戸市中取締りの役目を担当した。浪士五百名を集め江戸内外の擾乱工作を取り仕切っていた江戸の薩摩屋敷を攻撃し、焼き討ちして五十人近くの薩摩藩士を殺した。

戊辰戦争でも官軍と勇敢に戦い敗戦した。会津と並ぶ徹底抗戦派であった同藩では、鶴岡城の落城に際して、藩主酒井忠篤の斬首を含む極めて厳しい処罰を覚悟した。

藩主も藩士も白装束に身を固め、降伏式会場のふすまの後方には五十人の槍の名人が待機し、降伏条件如何によっては打って出て全員切り死の覚悟で式に臨んだ。会場で西郷の意向を汲んで黒田が官軍代表として藩主に接した時、帯刀を許し、上座に据え、礼を尽くした。一般藩士にも帯刀を許し、外出も自由にさせた。

「庄内藩は幕府のために徹底的に戦い、立派であった。藩主の斬首はもってのほか」という西郷の寛大な処置を知り、同藩の人々は感動した。

さらに提出された武器目録をみて、「北国の雄藩である貴藩はロシアの侵略に備えて全部の武器を保管されたし」と返事し、藩主以下家臣全員感涙にむせた。このことを知った庄内藩士は、後日藩主以下七十人が西郷の教えを乞いに薩摩にやってきた。

かの名高い書物、「西郷南州遺訓」は、家老菅実秀が若者を連れて何度も鹿児島にやってきて受けた西郷の教えを纏めたものである。私学校が設立されると子弟を学ばせた。西南戦争では、二十才と十八才の若い庄内藩士が薩摩軍に参加し戦死している。

戊辰戦争後百四十年以上経過した今日でも鶴岡の人々の西郷に対する気持ちは変わらず、一九六九年（昭和四十四年）鹿児島市は鶴岡市と兄弟都市の盟約を結び、一九七五年以降中学生が相互親善訪問を続けている。

一九七六年には鹿児島の南州神社から西郷の霊を分祀し酒田市に分社した。それ故に、南州神社は奄美大島、都城を含めて全国四カ所で祀られている。

《薩摩と中央政府》

司馬遼太郎によれば、薩摩は過去五回敢然と中央政府に刃向かっている。

一回目は、八世紀初期の隼人族の反乱、二回目は九州全土の平定を目指す薩摩とそれに対抗する秀吉との戦い、三回目は、徳川家康を相手にした関が原の戦いである。四回目は、徳川幕府を倒して新政府を樹立したこと、五回目は、西南戦争である。

日本の歴史において、一地方勢力がこれほど大規模に抵抗した事はない。第二、三、四回目の戦では、現実を直視した見事な外交能力を持って対処している。これらのうち、一、二回目の戦いについて述べる。

はじめは、西暦七二〇年に起こった隼人族の反乱である。隼人族が政府の出先機関である大宰府の支配に従わないので、大和朝廷が直接鎮圧に乗り出してきた。隼人軍は地元で大和朝廷派遣軍と戦ったが、千四百余の首を掻き取られて敗戦した。この時の朝廷軍総司令官は歌人である大伴旅人であった。その後、隼人族は朝廷の番人となった。なお、旅人は「海行かば」の和歌で有名な大伴家持の父親である。

二回目の秀吉との戦いでは、薩摩軍は二十万の敵軍によって川内まで攻め込まれたが、余力を残して和を乞い、領土は元々の薩摩、大隅、日向の三州に安堵した。

終戦処理のため薩摩に残留した石田三成に、藩財政運営の仕組みを教えられた。それは、全国から商品が一旦大阪に集まり、市が立ち、全国に出荷されていくという信長・秀吉が築いた商品経済体制を利用することと帳簿の管理技術であった。それ迄自給経済でやってきた薩摩にとっては初めての知識であり、以後それを積極的に活用した。それ以前は販路がなく放置されていた琉球貿易も日の目を見ることになった。

上述したように、薩摩は中央政権に対し大規模な戦争を五回挑んできた。その結果他藩のことをよく知り、冷静な現実的判断力、優れた外交手腕と積極果敢な行動力で八百年にわたり独立した空間を維持してきた。このような例は薩摩を除いて他に類を見ない。

なお、詳細は記憶にないが、島津家の当主忠重氏が対談で、「薩摩が昭和十年代

の政権を担当していたら、日本は太平洋戦争を起こさなかったであろう」と発言していた。仮の話とはいえ、その指摘は的を得ているように思われる。

現代の政治家達よ、かつての薩摩が保持していた誇り、情報収集への努力、冷静な判断力、知恵、勇気、行動力、見事な外交能力を見習い、堂々たる態度で国政を担ってほしい。

《パリ万博》

駐日仏公使であるロッシュの呼びかけで、徳川幕府最後の年一八六七年（慶応三年）に開催されたパリ万博に幕府、薩摩藩、肥前藩と江戸商人が参加した。

薩摩が万博に参加した目的は、斉彬時代から計画があった海外への進出、幕府が日本唯一の政権でないことを国際的にアピールすること、薩摩藩の売り込みなどであった。万博に際しては、英国に密航していた薩摩藩留学生が大活躍し、薩摩藩の成功に貢献した。

幕府は薩摩が幕府の下で参加するものと理解していたが、いざ開催されるとびっくり仰天。薩摩は、「日本国薩摩大守政府」の名で独立してパビリオンを設け薩摩焼、漆器、扇、樟脳、泡盛などの薩摩・琉球の産物を百種以上出品した。

そのため予め四百箱に及ぶ出品物を薩摩からパリに輸送したのである。小松帯刀総指揮の下一年前から周到なる準備を重ねていた。帯刀本人が参加したかったのであるが、城代家老という立場上、長期の出張ができず、家老岩下方平を代表として派遣した。使節団は岩下以下英国人二人を含め十二人で構成されていた。

欧州に派遣されていた新納久宣、五大友厚、森有礼等も駆けつけて業務を支援した。藩が雇用した仏人のモンブラン伯爵がフランス政府、万博組織委員会、欧州の報道陣を相手に縦横無尽の活動をした。

独自のブースを設け、丸に十字の旗を掲げ、薩摩・琉球国という勲章も用意してナポレオン三世を始めとする高官に贈与したので好評を得て、薩摩政府は各国に大君政府と同格の独立国家との印象を与えたが、二月遅れでフランスにやってきた徳川慶喜の弟昭武率いる二十八人よりなる幕府代表団から猛烈な抗議を受けた。

一枚上手を行く薩摩外交にしてやられたりで、切歯扼腕したが後の祭りであった。現場では、後日それぞれ東京商工会議所と大阪商工会議所の会頭となる幕府の渋沢栄一と薩摩の五大友厚が参加していた。

薩摩の万博参加によって、朝廷には薩摩が幕府と同等の独立国であるとの認識をさせたほか、幕府とフランス間で進められていた六百万ドルの借款契約を破棄に追い込むという大きな成果を得た。

この借款が成立しフランス陸軍の指導の下に幕府軍の装備近代化が実行されると、倒幕勢力は軍事的に幕府に対抗できなくなるため、どうしてもこの契約を潰さねばならなかったのである。

江戸商人が設けた茶屋で三人の芸者が茶の接待等に努めたので、人気の的になった。「カルメン」の作者メリメも茶屋の“カフェ・オ・レのような皮膚をした芸者”を見て大いに満足したと記している。

徳川昭武は万博終了後西欧五カ国を歴訪し、パリで留学生活を始めた矢先に幕府崩壊の報と帰国命令を受けて帰国した。船が薩摩の沖を通過するとき、幕府使節団団長を務めた徳川昭武はパリで薩摩に手玉に取られたことに対し“＊＊＊＊・・・”と悪態をついたと伝えられている。

《ペリー以前にやってきたフランスの黒船》

ペリーの黒船来日の九年前、フランスの軍艦が一八四四年に通商を求めて琉球に来航し、強引に宣教師を残して退去した。難民の漂流や薪水の供給を求めたのではなく通商を要求してやってきたので、琉球政府、薩摩藩は驚いたが、幕府は外圧として深刻に受け止めた。

これは「薩摩の黒船」と呼ばれている。翌年も英船が来て琉球政府の意向を無視して宣教師を残留させた。また、仏艦も再度やってきて通商を強く求めた。それは市場争いの一環で、いち早く中国に足場を築いた英国への対抗意識の成せる業であった。

宣教師は布教のほかに、市場獲得の先兵としての役割を担っていたのである。斉彬は老中阿部正弘と相談し、最悪の場合は琉球限りでの通商はやむを得ないとの内諾を得た上で、警備兵を琉球に派遣した。

一八五五年琉球政府とフランス間で「琉球仏修好条約」が締結された。ただし、この条約で認められたのは、薪水食糧の供給とフランス人の自由行動のみで、通商と布教は対象外であった。

幕府は外圧に屈して、一八五四年神奈川条約で下田、函館、長崎を開港した。米国は下田ではなく薩摩の山川港の開港を求めてきていたのであるが。斉彬は、軍備を充実することなく外国の圧力に屈して開港しようとする幕府に対し焦りを感じると共に、幕府に海外貿易を独占されることを恐れていた。それで国防力強化と交易、販路の拡大を求めて思い切った手段を講じた。

幕府、中国、諸外国に極秘裏に、一八五七年フランスとの間で琉球王国の名で軍艦の購入交渉を開始させた。交渉はかなりの段階まで進んでいたが、斉彬の急死と共に久光はこの案件を破棄したので、この件は幕府に発覚することはなかった。それにしても、斉彬の先見性と大胆さには驚くばかりである。

明治維新に重大な影響を及ぼした海外貿易について補足する。足利義満のように時の政府はそれで莫大な収益を上げていた。信長、秀吉、家康然り。彼等はそれを政府の独占事業とした。しかし、薩摩、肥前、長州等は密貿易でかなりの額の藩収入を得ていた。依って明治維新の原因を、海外貿易を巡る幕府と西国諸藩の争いとみなす経済史の専門家は少なくない。

《明治維新と薩摩》

明治維新は、士農工商と身分の格差がある幕末に、士族が新しい国造りを目指して起したいわゆる「革命」である。

一八五三年の黒舟の来航から一八六七年新政府が誕生するまで十四年間に亘り多くの武士が命を捧げ、大名も多大な出費をして戦役に参加した。しかし勝者たる武士階級が獲得した特権を放棄して、一八六九年版籍奉還、一八七〇年に四民平等、一八七一年に廃藩置県という大手術を断行した。

欧州なら一つの勅諭を以って国王が所有する領土と実権を放棄させ国を統一すると言うような大改革は考えられず、相当長期間にわたって大戦争になったであろう。日本民族は世界に全く例を見ないすごいことをやったものである。

明治維新に際して、他藩では脱藩した「志士」個人の活躍が顕著である。しかし、薩摩藩においては、藩主以下「藩士」が一丸となって、力を分散させることなく、組織の力で維新を成し遂げたことを特徴とする。

斉彬公、小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通等は明治維新の大なる功労者である。その中で小松帯刀の果した役割は西郷隆盛、大久保利通、坂本竜馬等に優るとも劣らない。

現在の西欧史観では、維新以前の日本人で世界に通用する偉人・英雄は織田信長のみであろうと思われる。しかし、明治維新を契機に、薩摩は大久保利通という世界基準の大物を誕生させた。

新政府成立後活躍した山本権兵衛、東郷平八郎も、維新たけなわの頃はまだ若年で弾運び、あるいは兵士としての従軍程度の活躍しかしていないが、世界に通用する男達である。小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通等の爽やかで無私の身のこなし方は薩摩武士道の鏡であり、薩摩の誇りである。

《調所広郷と浜崎太平次の活躍》

この項では国家公共の発展を願い、奉公の精神をもって破綻状態の財政を再建し、薩摩藩が明治維新で活躍できる基盤を確立した二人の男とそれを支えた奄美諸島の血の滲むような犠牲と貢献について述べる。

天明二～七年（一七八二～八七年）東北地方の冷害を発端として大凶作が続き、天明の大飢饉が起こり、死者は四十～百万人に達した。さらに天保四～十年（一八三三～三九年）にも一年おきに平年作の約五十％という凶作に見舞われ、二十～三十万人が餓死している。このため農民が逃散し、百姓一揆が発生し、農村、都市には貧窮者が溢れ、打ちこわしが激化し、社会不安が世を覆った。

さらに、米に立脚していた農本経済が商品経済、貨幣経済の発展に対応できなくなり幕府、諸藩とも借金で身動きの出来ない程の財政難に陥り、武士、百姓は窮乏を極めるようになった。

これ等に対し、幕府は徳川吉宗による享保の改革（一七一六～四五年）、田沼意次の改革（一七六七～八六年）、松平定信の寛政の改革（一七八七～九三年）、水野忠邦による天保の改革（一八四一～四三年）で幕政の改革を図った。享保の改革は一応の成果をあげた。

田沼は商業資本の利用と殖産興業に重点を置き成果が期待されたが天明の大飢饉、賄賂政治の不評で老中を罷免されてしまった。寛政の改革は倹約令、棄捐令、緊縮財政で成果なし。天保の改革は積極策に乏しく失敗に終わった。

これらのうち特に明治維新の前哨戦たる幕末に取り組んだ天保期の改革の成果がその後の幕府と雄藩の明暗を分けることになった。

幕府は天保の改革で幕府の権威回復に務めたが成果なく失敗に終り、幕府は足早に崩壊の道を辿ることになる。一方、薩摩、長州等は血の出るような激しい改革を実施し、借金で身動きの出来ない状態から財政的に体力を回復し、新しい国造りに邁進することが出来た。

薩摩では調所広郷、長州では村田清風が財政を立て直したが、彼等の成果なくしては維新の大事業はなかったといっても過言ではない。彼等は、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允等に勝るとも劣らない程の偉業をなしている。

調所広郷は薩摩藩の年収が十三～十四万両しかないのに、五百万両の借金を抱え年間の利子だけでも六十万両という破綻した財政再建に、全身に泥をかぶりながら己を捨てて取り組んだ。

幕府に密貿易を追及され、藩主と藩に責任が及ばないように、責めを一身に負い、黙秘のうちに毒を呷って自裁している。辞世の句に曰く

「何事も　嘘偽りの　世の中を　見て捨て難き薩摩魂」

経済は全くの素人であるにも拘わらず、誰も嫌がる改革、藩経済再建という裏方仕事を命じられ、敢然と挑戦し三十年間に亘る大手術の末財政立て直しに成功している。

山ほどある闇は調所の命と共にあの世に持って行っている。武士として実に見上げた男だ。財政再建のため冷酷な処置も取らざるを得なかったため、日の当る場で活動した明治の元勲たちに比べると人々の抱いている印象は決して良くはないが、新国家建設に貢献し薩摩が誇る第一級の人物であることは間違いない。

調所と彼を支えた浜崎等の藩財政立て直しがなければ、日本の国造りにおける斉彬公、西郷、大久保、小松等の活躍はなかったといっても過言ではない。

しかしながら調所は財政立て直しの偉業にも拘らず後継者選びで久光派の中心人物の一人であったことから、多くの薩摩系元勲達に佞臣と見做され、たまに彼の功績に対して贈位の話が出ても彼等の横槍で潰された。遺児は家禄を下げられ、鹿児島では冷たい扱いを受けて一家離散の憂き目をみている。

西南戦争後僅かながら再評価の機運が高まり、功績の編纂が行われたが、記録のかなりの部分が反調所派によって焼却されていたことが判明した。平成十年に

ようやく天保山公園に調所の銅像が建立された。しかし現在でも彼の汚名は残っており、彼の偉業は正当に評価されていない。

調所広郷の生き様を振り返ってみよう。

安永五年（一七七六年）に生まれ、嘉永元年（一八四八年）没している。享年七十三才。武士の最下層である小姓組に属する城下士の息子として生まれ、十二才で調所家の養子となり茶坊主として出仕し、二十二才で出府した江戸で前藩主島津重豪に才能を見出され登用される。

重豪は三十三年にわたり藩を治め、英君と呼ばれるに相応しい藩主であった。英邁な気質で進取の精神に富み学問好きの彼は、造士館、演武館を創設し、医学院、薬園を充実させた。中国語辞典を編集し、蘭学に懲り、孫の斉彬を連れてシーボルトとも会見している。藩士のために遊郭や芝居小屋まで建てている。

大名や将軍家と婚姻関係を結び藩の地位向上を図り、彼の娘茂姫を十一代将軍家斉に嫁がせている。派手な性質とも相まって、藩の実力以上の出費が重なり財政は大赤字であった。

彼は引退して長男の斉宣に藩主の座を譲った。新藩主は人事を一新し財政再建に取り掛かるが、それは重豪のやり方をほぼ全面的に否定した方策であったため引退したはずの重豪が激怒し、新首脳部の十三人を切腹に追い込み、斉宣を退位させて孫の斉興を藩主に据えた。この事件が世にいう「近思録崩れ」である。

調所は斉興の下で町奉行、小林、鹿屋、佐多、および志布志の地頭を務めている。重豪は再び藩政に介入し、文化十年（一八一四年）大阪で徳政令を発して百二十万両の借財の破棄を宣言したが、上方銀主達の反発を買い、その後薩摩藩に貸し出す銀主がいなくなり、藩の財政が混乱に陥った。

文政七年（一八二四年）調所は重豪の側用人格に就任して唐物貿易に従事し、幕府から許可を受けていない商品の密貿易（抜け荷）にも手を染めるが、膨大な額の借金を前にしては焼け石に水の状態であった。

この頃の藩の収支を見てみよう。年収は十三万両程度しかないのに、支出は十九・八万両であった。支出の内訳は参勤交代費用を含む江戸藩邸の維持費が十万両で五割、借金の利子払いが八万両で四割を占め、家臣の俸給もままならず支払いは大幅に遅れることが多かった。

幕末には多くのというよりも殆どの藩は借金で首が回らず、参勤交代の費用を用意するのが一苦労であった。江戸への途中で資金不足で立ち往生する藩も見られた。

薩摩藩も大阪まで来たはよいが、費用不足に陥り前に進むことができず、大阪藩邸の藩士が必死に駆けずり回って金を集め江戸に向うことが出来たこともあった。

文政十年（一八二七年）銀主たちとの借り入れ交渉に失敗し、藩は事態を打開できる人材を物色した結果調所に白羽の矢を立てた。重豪は財政再建を命じたが、彼は経済は素人であるからと断った。重豪は逆らえば叩き斬らんというような強い態度で刀をちらつかせて五十六才の調所を命に服させた。

前任者から上方の銀主達との交渉を引き継いだ調所が話合おうとしても彼等は全く相手にしてくれなかった。

やがて出雲屋孫兵衛という商人が調所の清廉潔白で実直な人柄を見込んで協力してくれることになり、新たな銀主を集めることが出来た。この出雲屋は財政再建のコンサルタントの役目を果たし多大の貢献をしたので藩は彼に「浜村」という名前と帯刀を許した。

天保元年（一八三〇年）調所は重豪から次の三ケ条の命令を書いた朱印状を渡された。この目的達成のために独裁的権限と家老格の地位を与えられた。

・天保二年から十年間に五十万両の積立金をつくること
・そのほかに平時並びに非常時の手当てを蓄えること
・古い借金の証文を取り返すこと

重豪は八十九才でこの世を去ったが財政再建策は斉興に引き続かれ、調所は正式に家老職に就任した。

天保六年（一八三五年）調所は五百万両の債権の整理に着手した。二百人以上の債権者を集めて「五百万両を二百五十年割賦、無利子償還、返済は元金のみ」と宣言し、銀主から集めた証文を目の前で焼却して、「文句があるなら、この刀でこの体を好きなように斬ってもよい」と啖呵を切った。

債権者である銀主達はこの「踏み倒し」に激怒し、「他の大名が同じ事をしたら大変なことになる」と幕府に訴えた。

予め幕府に手を回し十万両の袖の下を渡しており、さらに将軍の正妻が重豪の娘ということもあって、薩摩藩と調所に司直の手は伸びることはなかった。浜村孫兵衛は逮捕され、「大阪追放」処分を受けた。地元薩摩の債権者達にも「踏み倒し」の措置を取ったが、彼等を武士の身分に取り立てて調所の手足として使い不満を押さえ込んでいる。

薩摩藩は「踏み倒し」同然の処置を取ったが、返済状況を見てみると、廃藩置県の翌年明治五年（一八七二年）まで三十五年間は律儀に返済している。債権者には密貿易品を取り扱わせ利益を上げさせている。

調所は米を中心とする農本主義封建体制から商品経済に移行しつつある時流を読み取り、藩に商社機能を持たせ、米、タバコ、菜種、胡麻、椎茸、ウコン、薬種、黒砂糖の品質を高め、収益の増加を図っている。

農産物のみならず硫黄、薩摩焼、織物、鰹節も販売商品としている。贋金つくりにも琉球貿易にも熱心に取り組んでいる。

贋金つくりは文久二年（一八六二年）十月天保通宝で試験的鋳造が行われ、十二月から本格操業に入り、一年半後の鋳造高は十万両に達している。鋳造所は薩英戦争で焼失したが戦後再開し、一八六四年の一年間で四十三・七万両鋳造し、経費を差し引いて四十万両の利益を得ている。

慶応元年（一八六五年）には二分金の贋金を鋳造している。幕府権力の衰退した当時においては、薩摩藩の他会津藩、名古屋藩、安芸藩等でも二分金を密造している。

調所広郷を語るとき避けられないのが二十七代藩主斉興の後継者選びの際の「お由羅騒動」である。

当時薩摩は斉彬を推す派と久光を推す派に分かれて争った。斉彬派は西郷、大久保など精忠組が属する下級武士に強く支持され、一方久光派は調所広郷、島津将曹、島津豊後ら藩重役たちも久光擁立を強く支持していた。

斉興と妾のお由羅は世子である斉彬よりも妾腹である久光を望んだ。斉彬は聡明であるが重豪に似て西洋かぶれと見做され、折角二百五十万両蓄積した財政が再び悪化することを恐れたのである。

斉彬と調所は敵対視した。それは調所の関心は薩摩藩にあるが、斉彬は日本という国家の将来と植民地化を進める欧米諸国のアジア進出の阻止まで考え、それに対抗するには殖産興業と富国強兵で外国勢を撃破出来る国力をつける構想を持っていたからである。血を吐く思いで財政再建に取り組んできた調所にとって、斉彬の構想は重豪の浪費の悪夢の再来としか写らなかったであろう。

お由羅騒動では久光派の筆頭家老島津将曹を暗殺しようとした計画が漏れ、切腹十四人、遠島九人、そのほか五十余人に及ぶ厳しい処分が行われた。西郷は赤山靱負が切腹した時の血の滲んだ肌着を形見として受けとった。大久保の父は島流しにされた。

斉彬の英明さと高い見識は幕府や心ある大名に知られており、彼等は斉彬が藩主の座を譲り受け中央で活躍することを望んでいた。斉彬は幕府老中阿部正弘と結託して、薩摩藩の密貿易を探求すると脅して斉興と調所の降板を図った。

幕府は調所を内密に江戸城に呼び出し、斉彬から得た密貿易の情報をつき付け斉興の隠居を促したと推定される。調所は密貿易の責任を一身に被って自裁した。

斉興は調所は斉彬と阿部の企みで詰め腹を切らされたと思い込み頑なに引退に反対したが、ついに幕閣が乗り出し将軍家慶が斉興に隠居を暗示する茶器を下賜した。斉興は五十九才であったが隠居を決心し、斉彬は四十三才で二十八代の薩摩藩主の座につくことができた。

かくして一件落着したが、西郷、大久保を中心とする精忠組の面々が明治維新の立役者となり、その後も彼等が久光に面と向っては反対できないことも加わって憎悪の念が増幅され、調所家は徹底的に迫害を受けることになった。

平成九年指宿の浜崎太平次公園に、右手に扇子を左手には分度器を持った八代目浜崎太平次の銅像が建立された。彼は並外れた商才と度胸を武器として、薩摩藩の御用商人となって調所を助け、破綻した薩摩藩財政の再建に貢献した九州一の大商人である。

一八一四年指宿市に生まれ、「やまき」の屋号で大活躍し、一八六三年五十才の時大阪で死去している。彼は物事を鳥瞰的に把握できる広い視野と度胸をもって、幕末動乱時商業を通じて薩摩のみならず日本の社会の改革に貢献した薩摩の誇る偉大な男である。

浜崎家は代々廻船商を営んでいたが、落ちぶれて昔日の面影は失せていた。八代目の太平次は十四才で、板子一枚めくれば荒海へ放り出されるしかない海の男の世界に飛び込んで琉球に渡った。当時の日本船は幕府の規制により船体構造が極めて脆く、遭難と隣り合わせであった。

ここで当時の船について一言。徳川幕府が覇権を握ると、幕藩体制維持のため五百石以上の大型船を淡路島に集め焼き払ってしまった。一六三三年には千五百石（約二百トン）以上の大型船建造禁止令が発令され、同時に竜骨と甲板の設置は禁止され、外洋の航海には極めて脆い竜骨と甲板のない昔の和船の構造に戻ってしまった。さらに帆柱は一本、帆は一枚に制限されたので沿岸航海用の小型船しか造れなくなってしまった。

和船は竜骨が無いため戦隊構造が脆弱になり、甲板がないため嵐に遭遇すると雨水及び浸入する波浪により浸水して海難事故、漂流事故が絶えなかった。江戸時代、いや明治時代初期でも廻船は日本海側が主な航路であった。太平洋航路は天候が荒れると遠州灘等で遭難する事が多かった。

一六三五年には海外渡航並びに帰国を全面的に禁止してしまった。因みに、一六〇四～一六三五の三十二年間に三百五十六隻の朱印船が東南アジア各地を訪れ広範囲に交易をしていた。朱印船は二百～二百五十人が乗船する五百～七百五十トンの大型船で、中国のジャンク船、西洋のガレオン船の長所を取り入れて竜骨と甲板を備えていた。

山田長政がタイで活躍していた頃、アユタヤだけで四千人の日本人の滞在が記録されている。日本人と華僑の海外進出がほぼ同じ時期に始まったことを考えると、一六三五年幕府が海外渡航並びに帰国を全面的に禁止しなかったならば、その後東南アジアはおろかカリフォルニアやメキシコあたりでも日本語が話されていたかも知れない。

浜崎太平次は斉興、彬斉、忠義の三代の殿様に仕えた。幕府の手が彼に迫った時は斉彬自ら彼を護り、また彼（浜崎）が亡くなった時、久光に「右腕を失った」

と言わしめたほど信頼が厚く、薩摩に貢献した。病重く病床に伏している時、孝明天皇は侍医を彼のもとに派遣している。

彼は密貿易を含む貿易、海運、造船を主な生業とし、藩の御用商人として斉興、彬斉、忠義の三代の殿様に仕えた。毎年三十万両に及ぶ多大の資金を藩にもたらし、さらに膨大な額の資金を藩に献納し続け、薩摩藩が明治維新で活動する財源を支えた。

唐物、黒砂糖、北海道の昆布が主な商いであった。彼の全盛期である斉彬時代には三十四隻の大型船を所有し、指宿、長崎、下関、大阪、新潟、函館、奄美大島、琉球等の国内は言うまでもなく、清のアモイ、ジャワ、フランス、キューバ等とも幅広く交易を行った。

奄美諸島では、黒砂糖の回送業者に指名され、さらに薩摩藩と一緒に幕府に内緒で甘口醤油を製造してフランスに輸出している。このとき使われた輸出用の白磁、青磁、赤絵の三種類の瓶が尚古集成館に収蔵されている。また彼は薩摩藩と合弁して都城でテングサから寒天を作り中国とロシアに輸出した。

浜崎は米国の南北戦争のあおりを受けて国際的に綿花不足に陥った時、綿花交易に手を拡げて約十万両の利益を得ている。さらに南北戦争終結後余剰になった銃器を輸入し、薩摩や長州の新しい兵器の調達に貢献し、余った旧式の武器は幕府や諸藩に売りつけて膨大な収益をあげ、薩摩藩が明治維新で活躍できる資金の蓄積に貢献した。浜崎は紀州の「紀伊国屋文左衛門」、加賀の「銭屋五兵衛」と共に、「実業界の三傑」と言われている。

浜崎は当時「抜け荷」と称された密貿易で何度も危ない橋を渡っている。調所の下で加賀の銭屋五兵衛と北前船と唐物取引で密貿易を行っていたが、浜崎の船が座礁し、密貿易が暴露されそうになったことがある。浜崎、調所、銭屋、幕府の見事な連携プレーでもみ消している。

薩長同盟以前攘夷が叫ばれていた幕末、綿花貿易を目論む浜崎の船は長州側から見ると国益を損なう国賊行為として関門海峡で薩摩の船を狙い撃ちし、浜崎の船の船長が攘夷の志士達に惨殺された。当時薩摩では関門海峡を「三途の川」と呼んでいたほど危険に満ちていた。

川崎正蔵という薩摩人が、浜崎の長崎支店で十年間働いていた。彼は大阪に商店を開き浜崎の海運業を引き継いだが、台湾出兵、西南戦争における軍事輸送で岩崎弥太郎との競争に敗れたので海運業を止め造船業に乗り出した。

後日彼は日本の造船業界のパイオニアと呼ばれるようになった。彼の設立した会社が川崎造船で、現在の川崎重工業である。

彼は後継者として薩摩出身の総理大臣松方正義の三男幸次郎を社長に選んだ。幸次郎は私財を注いでモネ、ルノワール、ロダンなどの美術品を蒐集した。これが有名な「松方コレクション」で、それを母体にして東京上野に設立されたのが「国立西洋美術館」である。

調所、浜崎等による薩摩藩の財政改革に最も貢献した品は黒砂糖である。天保年間（一八三〇～四三年）黒砂糖による収益は約二百四十万両と見積もられている。これは江戸時代初期薩摩藩の支配下に置かれた奄美三島（奄美大島、徳之島、沖永良部島）の特産品である。その生産は元禄時代から始まっているが、薩摩藩は十八世紀中頃から高い商品価値に目を付け、砂糖きび優先の作付けを強制し、情け容赦ない徹底的な生産管理体制を敷いている。このため奄美の人たちは極めて厳しい収奪体制の下で過酷な生活を送らなければならなかった。その当時島民に歌われたもの悲しい島唄がある。

「かしゅてしゃんてな　誰（た）が為どなりゆる
　大和しゅぎりゃが　為どなりゆる」
「うしゅくガジュマル　石だちご太（ふで）る
　おきて黍見舞（すかみめ）
　島抱（た）ちご太（ふで）る」

（こんなに働いて誰の為になるのだろう。
　大和（薩摩）の衆のためにしかならないのだ）
（うしゅくガジュマルは石を抱いて大きくなるが、
　掟や黍見舞などの島役人は島から吸い上げた血で太る）
（安部龍太郎：薩摩燃ゆ）

砂糖きび植え付けのため米作は禁じられ、住民の主食は薩摩芋となった。以前は土地を三分割し、一／三づつ畑を休ませて地力の回復を図った「三圃農業」を行っていたが、増産のためこの方式が取れなくなった。平坦地や緩傾斜地は砂糖きびが植えられ、主食の芋は山を開いて植えざるを得なくなったが収穫が悪く、しばしば凶作や疫病に見舞われるようになった。宝暦五年（一七五五年）の凶作のときは、徳之島の島民が三千人も餓死している。これは「宝暦の大飢饉」といわれている。

大正時代以降になって、「宝暦の治水工事」の犠牲者は「薩摩義士」として顕彰されているが、「宝暦の大飢饉」の犠牲者は殆ど世に知られていない。

奄美の黒砂糖は、一八〇〇年以降薩摩藩の収益の大半を占め、さらにこれは明治維新で薩摩藩が活躍し新しい国造りの際の資金源であった。これは奄美の人々の犠牲の上に得られたものであり、薩摩人のみならず日本人全体が江戸時代に生きた奄美の人たちに深く感謝の気持ちを忘れてはならない。

《薩摩人の評価》

薩摩人を外国から見た場合どのように評価されるであろうか。最も人気がある

のは誰であろうか。国際的に通用する人物は誰であろうか。独断と偏見をもって薩摩人を評価してみる。

現在の世界史は西欧史観が主流である。それは力と一神教を基礎としており、徳を最大の徳目とする日本人の価値観とは相容れないものが多々ある。

日本では聖徳太子や上杉鷹山は評価が高いが、世界（西欧）基準ではそれほどの評価は得られないであろう。特に殿様が自ら率先して「肥えたご」を担いで国つくりに励んだ名主君上杉鷹山も軽蔑の対象にしかならないであろう。世界基準で見ると、明治以前の日本人の中で世界に通用する構想力と行動力を持った男は織田信長ぐらいであろうが、明治以降薩摩から世界に通用する男達が生まれたといえよう。

実績から見て薩摩で高い評価を得ている人物は、西郷隆盛、大久保利通、島津斉彬、小松帯刀、島津義弘、東郷平八郎、山本権兵衛などであろう。評価される英雄、偉人を日本と世界に分けて述べる。

日本・・・西郷隆盛、大久保利通、島津斉彬、小松帯刀

西欧を中心とする世界・・・大久保利通、山本権兵衛、東郷平八郎

日本における英雄は何と言っても西郷隆盛であろう。伝統的日本人の心情、徳を極めた人、「敬天愛人」そのものの人である。大久保利通は、西郷と車の両輪として働き、実績からいって西郷と同格あるいはそれ以上の実績がある。特に近代日本の諸制度の基礎は彼に依ると言っても過言でない。

島津斉彬は幕末混乱期、日本や薩摩の実力と現実を正確に見極め、先見性をもって日本や薩摩を正しく牽引した名君であった。斉彬公は五十才で死去したので実権を握り活躍できた期間は僅か七年と短いが、西郷隆盛や小松帯刀を見出し、活躍の場を与えた。

小松帯刀は若くして亡くなったが、生きていれば初代の日本の首相になれた人物である。嫌がる久光をくどき落とし、西郷、大久保や精忠組の面々に活躍の場を与え、斉彬公亡き後城代家老として産業育成に力を入れると共に、朝廷、幕府、諸藩との交渉や調停役を務め薩摩藩をうまくリードした。

坂本竜馬と海援隊、さらに長州藩を援助し、さらに薩長同盟、薩土同盟を結び、徳川慶喜に大政奉還を薦めた。明治三年に惜しくも三十五歳で死亡したが、鹿大の原口泉教授は小松帯刀のことを「坂本竜馬を超えた男」と言っている。小松帯刀がいなければ見事な薩摩藩の活躍は云うまでもなく、西郷隆盛、大久保利通、坂本竜馬等の活躍も無く、まさに彼等を超えた存在と言えよう。

力の政治、軍事力、合理性と鉄の意志を持った冷静な判断力、行動力を重視する西洋や世界では、近代日本の基礎を構築した最大の功労者として大久保利通を最高に評価するであろう。さらに、世界三大海軍男といわれ、無いない尽くしの状態から日本海軍を短期間に創設し、常識的には考えられない日本海海戦や日露戦争での勝利に大きく貢献した山本権兵衛も世界に通用する稀有な存在であろう。さらに、軍人の評価が高い西洋では、東郷平八郎もヒーローとして高く評価されるであろう。なお、島津義弘は世界的な広い活躍の場を与えられていたら、世界史に名を残していたかも知れない。

《なぜ薩摩は西南戦争後急速に衰退したか》

薩摩は新しい国造りの時はあれだけ優秀な人材を数多く輩出し、当時日本で最先端の科学技術と近代工場も抱えていたのに、西南戦争後なぜ急速に衰えてしまったのか、と疑問に思っている人は少なくないと思われる。それに対して、しばしば西南戦争で西郷、大久保の後継者と目される村田新八のような一流の人間と将来ある若者達約五千人が戦死して優秀な人材が払底したためとか、西南戦争で膨大な資産を使い果たした故とか、あるいは郷中教育がなくなったからという人もいる。それらはある程度的を射ているが時代の流れを考えるとそれだけとは言えない。そこに至るまでの薩摩藩のことを振り返ってみてみよう。

衰退していった原因は以下に述べるように幾つもある。それらは薩摩藩の体質に内在し栄光の陰に付き纏っていた弱点であった。そのなかでも世の中が大きく変革しつつあるにも拘らず問題点を見抜き適切な対応が取れる人材を活かしきれなかったことが、新時代建設の先導的な場を明け渡して経済発展から取り残されて行った最大の原因だろう。

先ず自然条件から見てみよう。薩摩は日本の南端に位置するので気候温暖で、黒潮に洗われ海の幸に恵まれているが、台風の通路であるため毎年被害を被ってきた。

七十万年前に鹿児島湾が誕生してから、北から南にかけて加久藤（三十万年前）、姶良（二十四万年前）、阿多（十万年）、鬼界（二・四万年前）の各カルデラの活動に伴って膨大な量の火砕流（シラス）が南九州を覆ってしまった。姶良カルデラを例に取ると、その噴出物が陸上で最も厚く堆積した箇所では二百ｍの厚さに達している。

火砕流は初生的には数百度に及ぶ高温の火山堆積物で、固結度が低く透水性が高いため水分も肥料分も表層の土壌に蓄積せず素通りして下に流れ去る。しかもシラスは農業に不向きな栄養分に乏しい酸性土壌である。この土壌では米を初めとする穀物の生産性、収穫率は低く、まともな収穫が得られるのは薩摩芋と桜島大根位であった。

薩摩藩が貧乏であった主要な原因の一つが、農業に適さないシラスの存在であったことは間違いない。さらに鹿児島はシラスが地表を広く被覆している故に降雨は直ちに地下深部に浸透して地下水となり地表で利用できないこと、また十分

な工業用水を採水できる河川が少ないため、製造工場の誘致と設置が見送られてきた。また、シラスは未固結で水分を含むとボロボロに崩れやすいため、激しい降雨に際しては地滑り、崖崩れの災害をもたらしてきた。

全国的には武士の比率は人口の六.三%程度であるが、薩摩では奄美・琉球の人口を含めた場合約二十九%、諸島部以外の比率は約三十八%と全国平均の約五倍にも達し、武士の多さが財政難の主な原因となっていた。

薩摩に士族が異常に多い理由は、秀吉、家康の軍門に下り、薩摩、大隅、日向の薩摩三州に安堵された後も、一五八七年島津義久が九州を平定した時抱えていた士族を減らさなかったことによる。もっとも士族の多さはいざと言う時は貴重な兵力となり、さらに民衆支配特に一揆の防止にも繋がってはいるが。

薩摩は、シラス土壌のため農業生産性は低く、米の生産には不向きで公表七十三万石は籾高のため実収入即ち玄米高ではその半分の約三十五万石しかなかった。このうち藩の年収は四割を年貢として徴収した僅か十四万石であった。出兵の際には石高の格式に従い実質二倍を負わなければならなかったので、参勤交代の費用の捻出も大きな問題であった。

ここで実質三十五万石の薩摩藩の位置を一六六四年当時の全国の順位から眺めてみよう。

第一位加賀藩（百三万石）、二位尾張藩（六十二）、三位紀伊藩（五十六）と四位伊達藩（五十六）、五位肥後藩（五十四）、六位越前藩（四十五）、七位筑前藩（四十三）、八位安芸藩（三十八）、九位長州藩（三十七）、十位肥前藩（三十六）、十一位薩摩藩（三十五）である。如何に背伸びしていたかお分かりであろう。

上述したように薩摩藩は士族の比率が異常に高く実質石高が半分しかないことのほか、婚姻関係を結んだ徳川将軍家や近衛家等への出費、五百万両に及ぶ借金などのため、藩の財政は破産寸前の状態であった。調所広郷の財政改革により借金は形式的には一応清算し、自由に処分できるかなりの資金を蓄積できた。

しかしその資金の大半は、軍備増強と倒幕の資金として使われ、民生用と殖産興業に回される金額は僅少であった。そのため公的教育設備の費用も捻出が困難で、藩校、私塾、寺子屋の数も全国最低であった。

ごく少数の藩校を除いて、専用の校舎はなく専門の教師は不在で、地区組織の年上者が指導する郷中教育で代用した。このような貧しい教育環境のため明治中期でも、児童の就学率は全国最低レベルであった。

幕末薩摩藩は列強による植民地化を防ぐため、総力をあげて富国強兵と殖産興業に取り組み、磯に千二百人の従業員を有する尚古集成館という日本で最も進んだ科学技術と近代工場を持っており、薩英戦争時には二百五十㎏の爆薬を内蔵した電気仕掛けの機雷を製造している。さらにそれに前後して近代的な小銃すら約四千挺も生産している。しかし当時国内ではそこで製造される大部分の製品に対する需要は殆どなく市場も小さかった。また、製品の殆どは大衆の生活に直接必要な品目ではなく、国民に購買力もなかった。

工場群を設置するに当って、将来製品の輸出を目標にしていたが、当時の品質は輸出できる水準には達していなかった。一言で言えば、明治時代初期では磯の先進的工業団地は「早すぎた工業化」で、工場が独り立ちできる条件が整っていなかった。しかしながら、地元が先見力と戦略思考を持った優秀な人材を排除せず歓迎して思う存分う力を振るわさせていたら、彼等は政府を口説いて公的資金の導入、人材の投入、新工場や研究所の誘致などに務め薩摩藩時代の巨大な遺産を最大限に活用したことだろう。

明治維新を迎えると、日本各地は封建社会に新しい風が吹き込まれて次第に近代社会に変化していった。しかし鹿児島は例外で、西南戦争後中央政府の体制に組み込まれるまで薩摩藩時代の古い体質と慣習が残っており、農民、職人、商人の自主的活動の芽が摘まれがちであった。

社会経済の基盤となる農業を例にあげると、鹿児島の農業技術は他県に比べて低く、穀物収穫高も低かった。さらに、栽培種の選択、創意工夫、自由販売など多くの点で自主性は著しく制限され、県（藩）による専売性並びに利益の収奪などの仕組みが存続しているため農民は自助努力を十分に発揮できなかった。

今日の日本でも、会社単位を基盤とした規範があり、それから外れるとその人は組織に受け入れられない傾向がみられる。新体制になっても鹿児島では旧藩の規範が社会の基準となっていた。古い秩序が残っているためよそ者に対して閉鎖的であり、伝統的な価値判断を尊重しない人は排除された。そのため新しい学問、思想、知識を習得した人達は、古い時代に生きている周囲の人々の理解を得られず浮いた存在になり易かった。

その一例として、異文化を学び広い知識を習得して帰国した薩摩英国留学生と関係者は地元で受け入れられず、五代友厚、寺島宗則、森有礼を含む大半の留学生は愛想を尽かして鹿児島を離れてしまった。

戊辰戦争で凱旋した下級武士達も維新の変革の進行につれ、かつて自分達が保有していた権益が失われていったので、不平不満が溜まり新政府に採用された者に対して非難と妬みを懐くようになった。

士族間の厳しい身分差と反目も有能な人達が郷土で働こうという意欲をを打ち砕いてしまった。それ故に有能な人材はますます官僚軍人の道を選んで地元を去って行き、地元の経済産業発展の長期計画、企業誘致など高度の判断と戦略を組み立てられる優秀な人材が鹿児島からいなくなった。

それがその後の経済的発展に取り残される大きな原因になったと考えられる。

当時鹿児島には大局を鳥瞰的に見て戦略的判断を下すことのできる人材はいなかったであろうが、仮にいたとしても地元ではその人の意見は取り入れられなかったであろうと思われる。

広い視野と行動力のある薩摩留学生だけでも自由に活動できる場があったならば、鹿児島のその後の進路も変っていたことだろう。時代の流れを俯瞰してそれに対蹠できる優秀な人的資源を十分に活用できなかったことが、鹿児島が時代に取り残される主要な原因の一つになったと推察される。

江戸末期になると、全国的に新田開発、農業技術の進歩、商品経済の発達などにより、経済的には農・工・商が豊かになった。それと対照的に顕著に地盤沈下したのは士族階級であり、彼等の多くは内職をせざるを得ない状況になった。

新政府首脳が生命を賭して版籍奉還を提案した時、藩主側があっさり受諾したのは如何に彼等の台所事情が苦しかったかの証左である。

他藩では江戸末期になると、渋沢栄一（豪農）、石田梅岩（商人）、中岡慎太郎（庄屋）、広瀬淡窓（富商）の例に見るように農業や商工業を基礎として豊かな農家、庄屋、商家の層が育ちはじめた。この層は志士を生み、その蓄えは商業資本等の元となり、地場産業の発展に繋がっていった。しかし薩摩藩は貧乏な上資金の大半は軍備と倒幕のために使われて、民生用と殖産興業用には小額しか配分されなかった。

薩摩には浜崎太平次で代表される有能な商家は存在したが、それは藩の商業活動と一体化したもので、利益の大半は藩に献上され、他藩のように庶民を対象にする純然たる民間資本は少なく、民間を相手にした商工業の自由な発達は遅れてしまった。そのため上述したような農工商の富裕層は生まれず他藩より発展が遅れることになった。

薩摩の誇る郷中教育は攻撃や突破口を切り開くには向いているが、時代が変革する中では必ずしも相応しいものではなくなった。世の中が学校の成績、事務処理能力、処世術などに長けた人に有利な社会環境に大きく変ったことも薩摩人には不利となった。

他藩に比べ、心の鍛錬に重点を置き、「屁理屈を言うな。言い訳をするな。泣くよっかひっ飛べ」等の伝統的薩摩の教育・文化・思考は、優等生的、デイベートの巧みさが要求される世界では普遍性に欠けた。明治維新で社会が変革した時、薩摩の人々は新しい時代の波について行けず、新時代では不利な立場となっていった。

《日の丸と島津斉彬》

日本人は古来太陽を信仰してきた。日の丸は太陽をデザインしたものである。世界的に太陽を赤で表す例は珍しく、普通黄色又は金色で、月は白色ないし銀色で表されている。日本もその例にもれず平安時代末期までは日輪は、赤地に金色で表示されてきた。その後、日本人好みで目出度い色である紅白で、すなわち、日の丸は白地に赤丸で表されるようになった。

日本では、日の丸は各所で広く用いられており、謙信、信玄、信長は旗指物として、朱印船や琉球船の旗として採用されてきた。

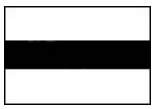
一八五四年日米和親条約締結後、国際的に外国船と区別するために日本の船印が必要になった。幕臣は下図に示す白地に中黒印の旗を日本の国旗として、日の丸を徳川幕府の旗とする意見が強かった。

水戸の徳川斉昭は、日の丸を日本の国旗とすべきとの建白書を幕府に提出した。斉彬は、水戸、越前、尾張、宇和島、肥前の藩主達と密接に協議し、日の丸への賛同を得ると共に老中阿部正弘に日の丸を国旗に制定すべきと進言した。一八五四年阿部正弘が日の丸を日本総船の印と決定を下した。

一般には斉彬公の進言で決まったように言われている。斉彬が大きな役割を果したことは間違いないが、斉昭、老中の尽力によるところも無視できない。この三人の尽力がなければ、日本の国旗は日の丸ではなくて中黒印になってしまった可能性がある。

なお、中黒印の旗は、白地に黒の横一文字の源氏の旗で、それを新田義貞が横中黒にデザインし使用したものである。

《日の丸》


《中黒印》

安政二年（一八五四）薩摩藩が幕府に献納するため、日本最初の西洋式軍艦である「昇平丸」は日の丸を揚げて錦江湾を後にした。これが公式に日本で最初に船に掲揚された日の丸であるとされている。

明治時代に、英国、フランス、オランダが日の丸の意匠を買い取ろうと日本に話を持ちかけたと言う話が残っている。明治七年（一八七四）英国が当時の金五百万円で意匠の買収をはかり、外務卿寺島宗則が交渉に当ったという話がまことしやかに伝えられている。しかし、いずれも真偽の程は不明である。

色違いを別にすれば、青地に黄丸のパラオの国旗、緑地の赤丸のバングラデシュの国旗は日の丸と同じデザインである。これらの国で、日の丸型デザインを採用するに当って、日本のイメージが強く影響したといわれている。

国家「君が代」の原型は、「古今和歌集」（九〇五年）の「賀歌」である「わが君は　千代に　八千代に　さざれ石の　巌となりて　苔のむすまで」であった。「私の尊敬しているあなた様は、小石が大きな巌となり、さらにその巌に苔が生えてくるように、千年も万年も長生きして下さい」という長寿を謡った目出度い歌で、全国的に祝賀の席で歌われ続けてきた。「和漢朗詠集」（一〇一三年）では「わが君・・」が「君が代・・」に改まってしまった。この歌詞を国歌に選んだ

のは、大山巌元帥であったと言われている。作曲は初め横浜駐屯の英国軍楽隊長が行ったが不評に終わった。現在のものは十年後の明治十三年に日本人により作曲し直されたものである。

《麦飯男爵：高木兼寛》

一般には余り知られていない薩摩の誇るべき高木兼寛を紹介しよう。高木兼寛は一八四九年薩摩藩の支藩である佐土原藩(現在宮崎県)で生まれ、海軍軍医総監となり、日本の医学発展に大きく貢献し、男爵を授与された。彼は脚気防止のため積極的に麦飯の摂食を推進したので「麦飯男爵」という綽名が付けられた。

英国で医学を学び帰国後、脚気の予防法を確立し、東京慈恵会医科大学並びに日本初の看護学校を設立した。当時日本ではドイツ医学を採用したので病理面を重視し患者を研究対象とした医学が主流を成していたが、高木は「病を診ずして病人を診よ」と、患者寄りの臨床医学を重視した。

脚気は第十三代家定将軍、十四代家茂将軍が死亡したように国民病の様相を為していた。白米を主食とし、蛋白質を摂らない食事のため、陸海軍では脚気患者の多さに悩まされていた。

海軍では三十％の将兵が患者であった。遠洋航海に出ると半数近くが脚気となり、死亡者も多数出て、戦闘能力が著しく低下した。当時下級兵士達は、貧農の出が多く、支給された副食費を切り詰め親に送金し、一日当たり六合の白米とタクアンという偏った食事を取っていた。そのためビタミン不足で脚気になっていたのである。

日露戦争を控え、陸海軍とも脚気は大問題となっていた。高木は、海軍で麦飯と蛋白質を摂る食事に切り替えさせ、脚気を退治した。陸軍ではドイツ医学の信奉者である森林太郎（鴎外）をはじめとする軍医達は、細菌が原因であるとして海軍の食事療法を無視し、日露戦争でも脚気による多数の死者を出した。

日清戦争では二十万の兵士が動員されたが、脚気死亡者は四千六十四人で、戦死者の四・二倍に及んだ。日露戦争の場合百九万の兵士が動員されたが、脚気死亡者は二・八万人で、戦死者の六十一％に達した。

元々海軍は陸軍より兵員数が一桁少ないが、海軍では日清、日露戦争の脚気死亡者はそれぞれ僅か〇および三名であった。度重なる海軍の忠告を無視し、多数の脚気死亡者を出した森林太郎をはじめとする陸軍軍医達の責任は極めて重いが、責任追及はなされずうやむやのうちに終わってしまった。

その後、脚気はビタミン不足による栄養障害であることが判明し、高木はビタミン発見の先駆者、あるいは栄養学者として特に外国で有名になった。一九五九年、英国の南極地名委員会が南極半島の地名に数名の世界的栄養学者、ビタミン学者の名をつけることになった時、その一箇所に「高木岬」(Takagi Promontory)という名が付けられた。脚気防止とビタミン発見の先駆者としての功績を称えられたのである。因みに国外で日本人の名前がついているのは、間宮海峡と高木岬だけである。

なお、宮崎市高岡町の彼の生誕地には「高木兼寛生誕地入口」というバス停がある。

《議を言うな》

薩摩には「議をいうな」と言う便利な言葉がある。「屁理屈を言うな、異義を申し立てるな」的にとらえられる場合が多いが、本当の意味は以下の通りである。

郷中教育では、にせ（二才）たちが集まり、武士としての心構えの涵養を目的として軍記などからテーマを選び詮議を行った。結論が出るまでは、年齢や資格の関係なく参加者全員徹底的に納得いくまで議論に議論を重ねてよい、いや議論すべし、というのが基本的姿勢であった。

「議をいうな」の真意は、一旦結論が出たらそれに異議を唱えてはならないという意味である。結論が出るまでは、薩摩にも西欧のいう「デイベート」が積極的に推奨されていたのである。

《酒とおなごでごわす》

薩摩人の代表的性質である「てげてげさ」を西郷兄弟の例で見てみよう。

明治の御代に代った時、国民全員姓名を登録しなければならなくなった。その時西郷さんは東京に不在であった。子供の時から西郷さんの同志で親友である吉井幸輔（友実）が代理で役所に届けた。

西郷さんが戻ってきて、吉井に礼を述べ、“おいの本名は、隆永（たかなが）じゃっど。隆盛でもよか”。実は隆盛は父親の名前であったのだ。

弟の西郷従道の場合、係りの役人がきて名を聞いた。“オイの名は音読みでリュウコウ（隆興）じゃ”と答え、無事登録は終了した。薩摩ナマリのため役人の耳には“ジュウドウ”と聞こえたのである。後日それがわかり、“なるほど、オイは、従道か”と大笑いした由。本名は隆興（タカオキ）であった。

ロシアの皇太子が日本を訪問した時、大津で巡査が皇太子を刀で切りつけた。これを口実にロシアは日本占領に乗り出すのではないかと国民、政府首脳は共に真っ青になった。

その頃は、江戸末期からロシアの南下政策、日本を植民地にするのではないかというロシアの野望を最大の恐怖と捉えていた弱肉強食が真っ盛りの時代である。

従道がお詫びのため日本政府を代表してロシアに出かけ、エカテリナ女帝に接見した。お詫びが終わったあと、女帝曰く、“ところで、日本の軍人さんの趣味は何ですか”。通訳は困ってもじもじしていたところ、女帝から正直に通訳しなさいと言われ、従道の言葉を伝えた。華やかで上品な宮廷外交のやり取りしか知らな

い女帝はそれを聞いて、びっくり仰天して笑い転げ、それまでの日本に対する悪感情を一発で吹き飛ばしたそうである。従道曰く、“オイの趣味は、酒とおなごでごわす”。

“出来すぎた話”をもう一つ。第一次大戦終了後、イタリアでのレセプションの席上、主賓である従道が挨拶した際の話。

従道おもむろに登壇、一瞬会場は静まりかえり、客の耳目は壇上の主賓に注がれた。“オイは、西郷従道でごわす。よろしく”とだけ言って降壇。さて、困ったのは通訳である。

彼はながながと喋りその場をうまく収めた。外国の外交団、いたく感心して曰く、“こんな長い話を何と短い日本語で表現できるのか。何と便利な優れた言語か”。実際には、通訳が目を白黒させながら適当に言い繕ったことが彼等には分からなかったのである。

《ソイ・ソース》

醤油のことをなぜ“ソイ・ソース、Soy Source”というのか不思議に思う人がいるのではないか。それは薩摩ナマリのせいらしい。薩摩流の発音は、西郷がセゴの如く言葉を縮めて発音する。醤油のことを“ソイ”と発音した薩摩弁のため、英語で醤油、大豆のことをそれぞれ“ソイ・ソース”、“ソイ・ビーン”となった次第である。

カゴッマ弁バンザイだ。なお、後述する浜崎太平次は奄美大島で醤油を醸造しフランスに輸出しているが、その時“ソイ”が国際的に広まったのかも知れない。

《シラスの下に先隼人族遺跡?》

鹿児島が東西に引っ張られ南北に開いて、鹿児島湾ができ始めたのが北京原人の出現より十万年ほど前の約七十万年前である。その後、薩摩では何度も大規模な火砕流（シラス）の噴火が起こった。それ等は、北から南へ加久藤（三十万年前活動）、姶良（二・四万年前）、阿多（十万年前）、鬼界（六千三百年前）等の各カルデラの形成に伴った火砕流（シラス）の活動である。

国分市上野原遺跡は、鬼界カルデラの火砕流アカホヤ層の襲撃で絶滅した我々の先祖の遺跡である。この遺跡は約九千年前のものと推定され、日本各地に分布する普通の縄文遺跡より一段と古い縄文遺跡である。

火砕流は時速数十～百㎞、温度最高七百～九百℃に及ぶ高温の火山灰・岩屑の高速流動体で、一瞬にして全てを焼き埋め尽くす恐ろしい自然現象である。

シラスに覆われると、シラスは酸性なので遺跡は残っても、人骨は溶けて残らない。現在姶良カルデラに伴う入戸火砕流が噴出すれば、数ケ月と言う短い期間に山形屋も、玉竜高校も、磯公園も埋没し、南九州全体が人っ子一人見当たらない月の砂漠になってしまうであろう。

薩摩には旧石器～縄文時代にも波状的に幾度も南方民族がやって来たことは間違いない。となると、度重なる火砕流の下部には未発見のごく古い先祖の遺跡が眠っていても何ら不思議ではない。

もう一つ別の可能性もある。現在の海水面から約百三十ｍ下部には地形的に水平な大陸棚が広がっており、薩摩では海底の大陸棚の幅は現在の海岸線から沖に向って十五～三十㎞であると推定される。これは一・七万年前の最終氷河期に形成されたもので、その後約八千年前から海水面上昇が始まり現在の水位に至っている。このように海水位も気候に合わせて絶えず上下しているのである。

海岸は魚、貝、海草など食料が豊富で住みやすい。旧石器から縄文時代にかけて薩摩に辿り着いた先祖の遺跡が当時の大陸棚に残っている可能性は否定できない。

以上を纏めると、カルデラ形成に伴い噴火した火砕流の下部や現在の海面下百三十ｍの大陸棚には、全く知られていない我々の遠い先祖の遺跡があるかも知れない。だれかその発見に挑戦してみては?

《日新公と「いろは歌」》

日新公、本名島津忠良は一四九二年に伊作島津の一子として生まれた。十五、十六世紀の薩摩では島津分家が数十家に及んでいたがそれを統一している。子の貴久兄弟、孫の義久義弘等と蒲生、菱刈、肝付氏などを制圧した後、日向の伊東氏との戦いを経て、薩摩、大隅、日向の三州の平定が間近に迫った一五六八年に日新公は没した。

島津義秀等によれば、「日新」とは殷の湯王が毎朝洗顔のとき水盤に刻した中国の四書の一つである「大学」にある「苟（まこと）に日に新たに、又日に新たなり」を読んで襟を正した故事に因むと言われている。

「いろは歌」は日新公が作ったものである。当時士民が書物に接することは困難であった。彼等の教化を考えていた公は、歌にすれば覚え易いとして「いろは歌」を考案した。

いろはにほへとの四十七文字の頭文字と和歌形式で始まるこの歌は、神道、仏教、儒教の教えを取り入れながら行動する武人および指導者としての心得、人の道、道徳、交友関係、博愛などについて詠んでいる。

この歌は郷中教育の精神的支柱と聖典であり、薩摩藩の教えの中核になった。日新公は薩摩人のあるべき姿を描き、後世まで最も強い影響を及ぼし「薩摩の中興の祖」と言われている。薩摩で行われる二才踊り、稚児踊りは日新公の発案によるという。

藩政時代には、執務を始める前に四十七首のうち以下に示す三首の「歌」を唱和した。歌の訳は島津家三十二代当主島津修久氏による。

一番（い）　いにしへの　道を聞きても　唱えても
わか行ひに　せずば甲斐なし
「古来から言われてきたどんなにすばらしい道も、
自分で実践して行わなければ何にもならない」

二番（ろ）　科ありて　人を切るとも　軽くすな
いかす刀も　ただひとつなり
「重大なミスを犯した者であっても簡単に裁いてはいけない。
その人を活かすも殺すもトップの心一つである。
適材適所の配を心がけよ」

三番（は）　もろもろの　国やところの　政道は
人に先ずよく　教へ習はせ
「色々な国や町の政治、法律や制令というものは、まずその民衆
に教え聴かせ理解してもらってから効果を期待すべきである。
その努力をせずして法の下に処罰したりしてはならない」

《薩摩堤防と木曽川工事》

青屋昌興に「薩摩史談」という著書があり、静岡市に残存する「薩摩堤防」と薩摩義士で有名な宝暦の治水工事に関し、今まで殆ど知られていなかったことについて述べられている。その大要を彼の著書から引用抜粋して紹介する。

一．薩摩堤防

これは「さつま土手」、「さつま通り」ともいわれている堤防である。この築堤は、家康の居城である駿府城の改修工事も含めて慶長十一年（一六〇六年）徳川家康が島津家久に命じて造らせたものである。薩摩藩では他藩のため財貨を投げ出すことは恥とされたこともあって、鹿児島県にはこの築堤工事に関する公表された資料は殆どない。

工事場所は駿府今の静岡市の安倍川で、江戸時代は川幅が広く急勾配で木曽三川より暴れ川であったといわれている。

築堤は「信玄堤」と同じ工法で造られており、総延長は七.七㎞に及んだが、堤防上部の幅は十一ｍと通常の倍以上あるので実質的に長さ十五㎞の堤防を築いた計算になる。これは木曽川の治水工事ほど難しくはなかったが、財政的には木曽川の工事以上の出費だったのではないか。

その後近代的堤防工事が行われたので、この「さつま土手」の必要はなくなり、跡地に道路が造られ、「さつま通り」と名づけられている。「さつま土手」は北部の方に一部だけ残って昔の姿をとどめている。

静岡市在住の鹿児島県人会の努力で「さつま土手の碑」が建てられている。土手周辺は静岡市が「さつま緑地」として手厚く保存しており、桜の名所と市民の憩いの場所となっている。

二．木曽川の治水工事（薩摩義士）

これは幕府に命令されて行った工事で、責任者平田靱負以下藩士五百六十七人、下人三百八十人合計九百四十七人が木曽川に出張して、十三カ月の苦労の末に完成させた。藩の年収の三年分以上の四十万両の出費を余儀なくされた治水工事である。

現在でこそ地元鹿児島でも「薩摩義士」の名を知らぬものはいないが、大正以前には宝暦四～五年（一七五四～一七五五年）の工事で命を捨てた人々は、褒章はおろか、彼等の死は秘密にされており、この偉大な業績は記録にさえ残されなかった。肉親さえ藩主や藩内の領民に相すまぬことをしたとして、子孫に手柄話として伝えられることもなかった。これは「薩摩堤防」と同じく、他藩のために財貨を使うことは不名誉とされたからである。

「薩摩義士」の名前も大正の初めまでわからなかった。大久保利貞海軍中将の努力とも相まって、愛知、岐阜、三重三県のお寺の過去帳から、現在知られている「薩摩義士」の名前が判明したのである。しかし、この工事による薩摩藩の犠牲者の数は出典により異なり、ある資料では九十一人（割腹六十人、病死三十一人）、別の資料では八十五人（憤死四十九人、病死三十六人）とまちまちである。見落とされている犠牲者もあると思われる。

明治三十年に現地に記念碑が建てられ、地元鹿児島では大正九年に城山の麓に「薩摩義士の碑」が建立された。昭和二十九年に「平田公園」と平田靱負の銅像が建てられた。

工事で完成した千本松原堤防は自然公園になり、地元の人々の憩いの場となっている。岐阜県では町村合併の際平田靱負にちなんで「平田町」の名が付けられている。また岐阜県では「薩摩義士」の業績を顕彰して「治水神社」が建てられている。

《焼酎「大警視」》

鹿児島市の中心から約三㎞離れた鹿児島市皆与志町（旧伊敷村比志島）に「大警視」という名のバス停がある。「大警視」、「川路大警視」、「巡査殿」なる銘の芋焼酎が発売元の鹿児島県警本部で売られている。

マルセイユ発花のパリ行きの汽車の窓から新聞紙に包んだ「黄金もの」を投げ捨てたところ、運悪く保線夫に命中し翌日の新聞に書きたてられた「チンプン」

騒動を起した薩摩隼人がいた。「〇〇どんのキンゴロ（金玉）」という逸話の主でもある。

一兵卒から身を起し日本の警察制度の制定という大偉業を果たし、警視総監まで上り詰めている。西南戦争では官軍の旅団長として三千人の羅卒を率いて参戦したが、地元では「西郷どんの敵」として彼の親族が七人も殺され首を晒されたという。その男の名は平成十一年（一九九九年）になって鹿児島県警本部前に銅像が建立された「川路利良」その人である。

川路は一八三四年薩摩藩卒族（与力）の長男として伊敷村比志島で誕生し、四十六才のとき東京で肺結核により死亡した。志士でいえば福井藩の橋本佐内、長州藩の広沢真臣と同い年である。

薩摩藩は極めて身分階級性に厳しく、卒族は城下士はおろか郷士（外城士）より身分が一段と低く、西郷や大久保ら四十数名の下級藩士で構成され明治維新の推進母体となった「精忠組」に入会する資格さえなかった。本来なら佩刀も出来ないほどで、一生うだつの上がらない惨めな生涯を送らざるを得ない境遇にあった。

この厳しい身分制度は、同じく低い身分に属していた伊藤博文、山県有朋の活躍でも分るように、比較的緩やかな長州藩のそれと対蹠的であった。

彼はその最低の身分から強烈な向上心と自助努力で這い上がり、日本の警察制度の基礎を構築するという偉業をなし遂げた。陸軍少将の地位まで昇進し、「オイが大名か・・」と驚いた正五位の大名の位（従五位以上）まで授与されている。武勇伝を交えながら彼の経歴を眺めてみよう。

先ずは「蛤ご門の変」（禁門の変ともいう）における武功からはじめよう。

長州は七卿の都落ちで知られる「八・一八の変」で京都を追放された。その後長州藩内では、失地回復を目指す来島又兵衛を頭とする強硬派の意見に対し、久坂玄端、高杉晋作、木戸孝允達は京都への武力進出は時期尚早として出兵に反対した。しかし、来島に「議論より　実をおこなへ　なまけ武士　国の大事を余所に見るばか」とけしかけられ、久坂玄端は参戦を余儀なくされた。

観念論気質の長州勢は、君側の奸を討てと成否を度外視して御所を攻撃し始めた。彼等は蛤ご門等で御所を守備していた会津・桑名・薩摩の軍隊に撃退された。

戦死者は長州勢は二百六十二人、会津、桑名、薩摩側は九十七人であり、京都は三日間燃え続け、二万八千余戸が焼失した。この戦いで長州側は久坂玄端など優秀な人材が多数戦死した。これが世にいう「蛤ご門の変」である。

この戦いには後日談がある。当時薩摩藩は公武合体を目指しており極端な尊皇攘夷の考えはなく朝廷に御所の守備を命ぜられていたので、御所に攻撃を仕掛け侵入してきた長州軍を撃退せざるを得なかったのである。しかし長州を裏切ったとして、同藩は「薩賊会奸」と薩摩藩を激しく敵視した。この対立は二年後「薩長同盟」が成立するまで続いた。

この戦いで川路は、葦毛の馬に乗り陣頭指揮していた敵将来島を射止めさせ、長州勢を撃退して戦いの流れを薩摩軍優勢に変えた。薩摩の川上助八郎が長州の陣地に突撃し敵方と斬り合いが始まろうとした時、「その勝負譲ってくれ！」と横から川路が躍り出てきた。相手は敵将国司信濃の家来で、剣の達人として有名な長州誠意隊の篠原秀太郎である。彼は見事な太刀捌きで会津、彦根の兵士の死体の山を築いていた。

川路はこの剣客を薬丸自顕流のすざましい必殺ワザで討ち取った。命拾いした川上の娘が、後の総理大臣松方正義に嫁いで生まれた女子がライシャワー元米国大使ハル夫人である。

京の都の「蛤ご門の変」では幾度にも及ぶ斬り込みにより、川路の刀は二十余箇所の刃こぼれで鋸のようにささくれ立ってしまった。戦いが終って川路の大きな戦功に対し、薩摩軍総大将島津珍彦（久光三男）より新しい刀を下賜され、川路は漸く卒族の身分を超え公式に佩刀することが認められることになった。

西郷がこの勇猛果敢な川路の活躍を知るところとなった。論功行賞として「学問をしたい」という本人の希望に沿って、洋式練兵と太鼓術の研究の名目で江戸に留学する機会が与えられた。

江戸ではそれらを調べる傍ら北辰一刀流の千葉周作道場で剣を磨き、同時に自ら江戸の社会、市政、民生、奉行所の活動などについて調査し、自分の意見を加えて西郷に報告した。

この報告書により、川路は兵家の他に刑名家即ち法家の素質もあると西郷、大久保等に認められた。後日警察制度の調査のため一八七一年にフランス留学を命じられ、それが後述する日本の警察制度の確立に繋がることになる。一方、剣術は「警視流」の流儀となって廃れ行く日本剣道を再興させることになった。

一八六八年一月の鳥羽・伏見の戦いでは、伊敷村比志島の卒族七十名よりなる抜刀隊を率い兵具隊の小隊長として任務である武器運搬に従事していたが、状況を見ては砲煙弾雨のなかを白刃を閃かして臨機応変に攻撃を仕掛け大きな軍功を立てた。捕虜も四十余名捕え、川路の戦功と指揮官としての優れた素質が薩軍幹部に知られるようになり、兵具奉行に昇進した。

同年五月の上野彰義隊との戦いでは最大の激戦地となった黒門口の攻略に参加し、さらに七月には白河・淺川の戦いに加わった。

「川路のキンゴロ」なる語がある。川路の冷静さと丈夫ぶりを称える言い回しだ。白河の戦いの最中、敵弾が川路の急所に命中した。流れる血潮をものともせ

ず太刀を振りかざし奮闘したが、出血のため意識を失って倒れ野戦病院に担ぎこまれた。診断結果一物の袋（陰嚢）の上部を貫通していたがタマはやられていなかった。戦いのさなかキンゴロがだらっとぶら下がっていたので、タマには命中しなかったのだ。「さすが川路どんじゃ。なんと肝の太か男か」と川路は一段と名を上げた。

男は時として「キンタマが縮み上がった」と表現することがある。これらのことは女性には分り難いと思われるので一寸説明する。白兵戦でいざ突撃などの生きるか死ぬかのような一大事のとき、金玉は緊張して袋が縮こまり少し上方に吊り上る。日露戦争で敵といざ戦闘開始という時、司令官東郷平八郎が部下に言った、「タマがちゃんとだらつとぶら下がっておるか確かめろ」。日本軍ではこの言葉は戦場で緊張をほぐす意味でしばしば発せられている。緊張し過ぎて平常心を失うなとの警句である。

明治維新は、独裁政治を行うことなく勝者が手にした特権を放棄し、自ら武士階級を消滅させ四民平等の世を築き国と国民の発展向上を目指し、大政奉還（一八六七年、明治元年）、版籍奉還（一八六九年）、四民平等（一八七〇年）、廃藩置県（一八七一年）、徴兵制（一八七三年）、秩禄処分（一八七五年）、廃刀令（一八七六年）等と矢継ぎ早に新政策を実行していった。しかし、急激な社会変革に伴う反動も大きく、佐賀の乱（一八七四年）、神風連の乱・秋月の乱・萩の乱（一八七六年）、西南戦争（一八七七年、明治十年）と不平士族の乱が続いた。

維新後武士の身分が廃止され、秩禄処分さらに秩禄公債により収入は半減し、その上公債による給付金は約七年で打ち切られた。旧藩制の秩禄処分を受け継いだ新政府の秩禄費は財政の四割にも達したので、財政健全化のため士族への支援が止められたのである。

幕末には、薩摩を除いて全国的には商品経済の発達に伴い、士農工商が商工農士と逆転しつつあった。相次ぐ特権剥奪に士族は生活困難となり、不満を持つ士族が増加し社会不安の状態にあった。

戊辰戦争で鹿児島から函館まで先頭に立って戦った八千三百名の薩摩兵は、官軍の最強兵団であったと胸を張り論功行賞と待遇改善を期待して帰郷した。

彼等を待っていた現実は厳しく、やがて行われた藩政改革では城下士を除いて全階級の家禄の上限が大幅に削減された。城下士には従軍期間に応じて四～八石の軍功禄が与えられたが、郷士には支給されなかった。その結果、元々対立していた城下士と郷士の間の溝がさらに深くなっていった。参考までに述べると、一八二六年当時の薩摩士族の構成比率は約一対十で、城下士一万六千七百九十四名、郷士十六万六千八百三十七名であった。

治安維持のため政府は一八七一年（明治四年）二月、薩摩長州土佐から一万名の天皇直属の兵である御親兵を東京に、四月に八千名の鎮台兵を全国四箇所に、同年十月市中警護のため三千名の羅卒（警察官）を東京に配備した。川路は西郷から三千名の羅卒のうち千名は薩摩から募集するよう命じられた。明治五年御親兵は廃止され近衛兵に改編された。

近衛兵、羅卒の構成において薩摩士族の占める割合は大きく、羅卒では一／三を占めている。警官の「おい、こら」なる語は薩摩出身の羅卒によってもたらされ、警察官を表現する「マッポ」という言葉は「薩摩つぽ」から生まれたと言われている。

薩摩士族の場合、戊辰戦争後の論功行賞やお国柄の厳しい身分制度を反映して近衛兵には城下士、羅卒には郷士が採用された。川路は低い身分のため軍隊、近衛軍への道を外された。この厳しい身分制度は、維新の理想と現実との隙間は埋められずに残っていた。設立間もない頃の近衛兵と羅卒間の争いや西南戦争時の城下士と郷士間の軋轢で代表されるように、一見一枚岩のように見える薩摩の人的纏まりに暗い影を落としている。この身分差のひどさは、西南戦争が始まる直前川路が羅卒に涙声で「諸君は故郷における恨みを今こそ思い出すべきである」と演説していることからも想像されよう。

廃藩置県後鹿児島県は中央政府の命令に背き税金は政府に納めず、地租改正、秩禄処分、廃刀令、太陽暦への変更も無視して半独立国の状態であった。征韓論に敗れて下野した西郷を慕って多数の薩摩人が政府、軍隊、警察などを辞職して帰鹿した。国家の非常時に役立つ人材の育成を目的として私学校が開設されていたが、西郷の思いとは逆にそこは反政府の中心的存在となっていった。

この動きを危惧した大久保、川路は二十一名の警察官を帰省させ鹿児島の情報収集に当たらせた。西郷の暗殺計画（？）が発覚し私学校生徒は激昂して蜂起を訴えたが、西郷をはじめとする幹部が抑えた。しかし急進派が鹿児島市の草牟田や磯にあった政府の火薬庫を襲撃するに至って西郷は腰を上げざるをえなくなり、明治十年二月十五日「政府へ尋問の筋これあり、旧兵隊等随行して上京」として大雪の鹿児島を出発した。

西郷軍の出陣は鹿児島上げての壮挙ではあろうが、上士には西郷党の私挙だと傍観する人もかなりいたと言われている。この出陣に対し法治国家を目指す新政府は、当然のこととして西郷軍を賊軍として鎮圧することを決定した。

政府軍の将兵には薩摩出身の軍人が少なからずいて、かっての仲間と干戈を交えることになった。この戦いが最後の不平士族の反乱となった西南戦争である。

上京に際して西郷は維新時と違って作戦に殆ど口を出すことなく、桐野利秋等の指揮に従った。西郷は政府に対する無謀な戦いの行く末を見通していた可能性

が考えられるが、将兵は楽観的で東京見物に行くような気軽さで、在京の知人へ土産を託されてそれを持参する兵士もいたほどであった。

前熊本鎮台司令長官であった桐野元陸軍少将などは、熊本の通過に問題はなくもし鎮台の妨害があれば青竹一本あれば粉砕できると豪語するほどであった。田原坂で消耗戦になったとき、八代に上陸した政府軍に背後を襲われ薩摩軍は撃退されている。

西南戦争で川路は陸軍少将として三千名の羅卒よりなる別働第三旅団を率いて戦った。官軍は鎮台兵、近衛軍、警察軍よりなり、その合計動員数は五万二千名、死傷者一万六千名であった。このうち警官の動員数は九千五百名、戦死者は六百七十名となっている。西郷軍の総動員は約三万名、死傷者は一万五千名であった。

西郷軍は四千丁の小銃、五十万発の小銃弾、約三十門の砲を用意したが、弾薬装備等の補給が絶対的に不十分で熊本城攻防戦でもたつく間に、体制を整え制海権を掌握し兵站の整った政府軍に一歩一歩と敗退していった。因みに政府軍が消費した弾薬の総数は小銃弾三千四百万発、砲弾七･四万発で、圧倒的な物量の差であり、総戦費は、官軍約四千二百万円、西郷軍約六十万円といわれている。

十七日間に及んだ田原坂の戦いでは、政府軍は一日平均三十二万発の小銃弾と千発の砲弾を消費したといわれている。戦傷者は両軍で三千名以上に達した。

田原坂で薩摩軍が、「赤帽（近衛兵）と銀筋（羅卒）がいなけりゃ　花のお江戸に踊り込む」のにと官軍に手古ずっていた。父兄や先輩達が一進一退の激戦の最中、鹿児島城下では子供達は次の歌を無邪気に歌っていたと言われている。

「大久保、川路は鰯か雑魚か鯛（隊）に逐（お）われて遁（に）げて行く
大久保、川路の首さへ取れば　可愛い鎮台は殺しやせぬ
大久保、川路を油で揚げて　薩摩西郷どんのお茶塩気」

西郷軍はその後も負け戦で退却し続けたが、弾薬の不足は目を覆うばかりで、鍋釜寺の鐘を鋳潰しやっと二千発／日の弾丸を製造した。しかし粗製のため真っ直ぐ飛ばず、飛距離もせいぜい一～三町程度しかなかった。最後は小石まで弾丸の代用として使用した。弾薬不足のため西郷軍は抜刀隊による斬り込みで対処せざるを得なかった。

百姓を中心として徴兵された鎮台兵は、西郷軍抜刀隊の斬り込みで度々潰走した。これに対処するため政府軍は、元会津士族などを中心とする警視庁巡査百人よりなる抜刀隊を編成し西郷軍に対抗した。なぜ元会津藩士が多いかといえば、会津戦争の仇を晴らすため、警視庁抜刀隊に参加したからである。この時の戦闘を詠った有名な「抜刀隊」の歌:

「吾は官軍我が敵は　天地容れざる朝敵ぞ
敵の大将たる者は　古今無双の英雄で
これに従う兵士（つわもの）は　ともに剽悍（ひょうかん）決死の士
鬼神に恥ぬ勇あるも　天の許さぬ反逆を
起せし者は昔より　栄えし例（ためし）あらざるぞ
敵の亡ぶる夫迄（それまで）は　進めや進め諸共に
玉ちる剣（つるぎ）抜き連れて　死ぬる覚悟で進むべし」

は日本最初の軍歌であり、行進曲「抜刀隊」は旧軍は言うまでもなく、現在でも陸上自衛隊、日本警察で公式行進曲として演奏されている。

なお、「田原坂」の歌

「雨は降る降る人馬は濡れる　越すに越されぬ田原坂
右手に血刀左手に手綱　馬上豊かな美少年」

に少年が登場する。この美少年は、西郷、大久保を継ぐべく薩摩の逸材と惜しまれた村田新八の長男岩熊がモデルではないかと言われている。

この役で新八は鹿児島市の岩崎谷で、岩熊は熊本県植木で戦死している。さらに、「田原坂」の歌詞の「左手に手綱」は元々は「左手に生首」であったが、余りにも生々しいとして「左手に手綱」に替えられたといわれている。

上述した西南戦争には旧会津藩士が参加している。それは西郷の官職辞任に伴って警視局の巡査まで多数退職してしまったので、川路が東京を守る巡査を旧会津藩から募集しところ、「鬼官兵衛」として武名を馳せた元会津藩家老佐川官兵衛が旧会津藩士三百八人を連れて警察軍に加わった。

西南戦争が始まると、彼等は薩摩に対する戊辰戦争の雪辱を晴らすために川路の下で参戦した。佐川は「鬼官兵衛」の名に恥じず勇猛果敢に戦ったが、阿蘇郡長陽村で銃弾を受けて戦死した。また、元会津藩家老山川浩も陸軍少佐として参戦した。彼は「薩摩人　みよや東（あずま）の大丈夫（ますらお）が　さげはく太刀は利（と）きか鈍（にぶ）きか」と和歌を詠んで出陣している。

彼の妹は、明治四年岩倉遣欧米使節団の五人の女子留学生の一人である山川捨松である。彼女は十二才で渡米し約十年間かの地に留学したが、帰国翌年陸軍卿大山巌と結婚し、後に鹿鳴館の女王と呼ばれた。結婚に際しては、山川浩は「会津の不倶戴天の敵薩摩人と結婚するとはなにごとか、絶対許さない」と怒り、揉めにもめた。結婚できたのは根気よく説得した西郷従道のお陰といわれている。

薩摩藩時代は顕在化していなかったが、前述した身分格差は薩摩藩の泣き所で、西郷軍の戦況が不利になった後半戦では城下士と郷士間の不和が顕在化してきた。薩摩最強の軍団と言われていた約六百名からなる出水の郷士団ですら六月中旬には政府軍に投降したように、郷士隊の中には前途に見切りをつけて戦線を離脱するものが続出した。

八月中旬延岡で西郷が「諸隊ともに進退は勝手にせられよ」と各隊幹部に言い渡したせいもあるが、この時一万人が政府軍に投降した。最終戦闘となった九月

二十四日の城山での西郷軍の軍勢は僅か三百余名で、その大部分は城下士で構成されていた。この西南戦争は、九カ月間政府と薩摩の間で戦われた戦争であったが、薩摩が敗北することにより以後不平士族の乱は収まった。

乃木大将が明治天皇の大葬の夜自刃した原因の一つが、西南戦争で歩兵十四連隊の連隊旗を奪われたことといわれている。その連隊旗手河原林雄大少尉を斬ったのは、西郷軍伊東隊分隊長の岩切正九郎で西南の役後吉野村の村長を務めた。

話は遡るが、明治四年司法省は司法制度の調査のため八名をフランスを含む欧州に派遣した。その中に帝都を守る警察制度の創設を目的として川路が含まれていた。人民保護のために自主独立の気風が色濃く残っていたフランスの制度を参考に出来たことは日本にとって幸運であった。

前述した「チンプン事件」はこのときの出来事で、便意を催したが便所が込んでいたのであろう、列車の中でやむを得ずひざ掛けで隠しながら新聞紙に出し、丸めて窓から投げ捨て知らぬ顔を決め込んでいた。しかし保線夫に当たった「ホカホカ団子」の包紙は日本の新聞紙であることが分り翌日地元の新聞で書き立てられ騒ぎになったのだ。

川路のパリ滞在は七カ月で、この間警視庁、監獄、兵舎などを訪問し、組織、仕事の分野、運営、給料の仕組などを鋭意調査した。パリ大学教授のボアソナード、など法律学者の講義も聴講した。

国家の根幹は法律であり、警察制度は重要な執行機関の一つであること、さらに三権分立が近代国家の骨格であり、それが西欧諸国の強さの秘訣であることが次第に分ってきた。パリのポリスは尊大さがなく親切である、これは日本も見習わなければならないとの強い印象を受けた。

それまで警察は鎮台の軍隊の下に置かれており、また司法警察（司法権）と行政警察（行政権）が分離されていなかった。それらの問題解決のため、一八七一年帰国報告書で内務省の設置の必要性を建議した。司法省に提出した「警察制度についての建議」は、日本の近代警察の原点になったのである。同年内務省が設置され大久保利通が内務卿に、川路が警視庁の大警視に任命された。警察権は内務省の、さらに司法権は司法省の管轄下に分離されることになった。

川路は西郷に認められてエリートコースを駆け上ってきた。ヨーロッパで警察制度を研究したとき、整った法制度と官僚制度で国民を統治している彼等のやり方を見て日本も見習うべきであるとし、同じ考えの大久保利通に共感を持つようになった。

彼は寝食を忘れて亡くなるまで睡眠時間は一日四時間という仕事一筋の生活を続け、近代的警察制度の確立に邁進した。大久保同様清廉潔白で蓄財もなかった。信賞必罰で厳しく規律を維持し、絶えず現場を見回り、部下と同じ厳しい環境下で激務に耐えた。事故犠牲者のもとには必ず駆けつけた。

司法省に提出した「警察制度についての建議」は、日本の近代警察の原点になったのである。「警察手眼」という非常に格調の高い口述録がある。これについて加来耕三著の「日本警察の父川路大警視」から以下に引用する「警察論語とも、バイブルとも呼ばれた大警視川路利良の口述録「警察手眼」は、川路自身も意識したように、警察官のみならず全公務員に当てはまるように述べられていた。

今日から振り返れば、日本型経営の原点ともいえる。武士道精神も多分に盛りこまれており、いま、問われている日本人のアイデンティティーについても、余すところなく語りつくされている。働くとはそも、いかなることなのか？」　現代の社会人が等しく見失ってしまったものがこの全文の中にある。

警察官は「声無きに聴き、形無きに視る」（相手がいない処でも、常にその声を聞き、相手の姿がないところでも、その姿見るかのようにする）の態度で「国民の楯となって、死ね」という川路の叱咤激励の言葉でもある。

一八七八年三月北海道開拓使長官黒田清隆夫人が亡くなった。世間では酒乱した清隆が夫人を斬殺したという噂が広がった。政府も真相究明の調査を迫られた。

川路は検死官を伴って黒田夫人の墓の棺を開いて、他殺の形跡なしと断定し棺の蓋を閉じた。これに対し同年五月大久保が紀尾井坂で暗殺されたとき、刺客たちは斬姦状に大久保等の罪状のほか川路の名をあげて「法律ヲ私スル」として仲間を庇い事件をもみ消したと非難した。

川路は故郷に戻れるまでに没後百二十年の長い月日を要した。同じく地元で人気のない大久保利通は百年を要した。二人とも鹿児島では「故郷に刀を向けた男」、「西郷の恩を仇で返した男」として長年受け入れられなかった。

しかし、明治政府の成立間もない極めて不安定なあの時期に、現実を見極め前向きで西南戦争に対処し、国作りに取り組んだ二人の活躍がなければ新政府は空中分解し、牙を砥いで虎視眈々と植民地化を狙っていた西欧諸国につけ込まれた可能性が大きい。

この点から考えると、二人の近代国家建設への功績は計り知れないものがあり、薩摩の誇る第一級の人物といえる。

《薩摩藩士の対決》

外部から見れば薩摩士族は、一枚岩で一致団結して明治維新や西南戦争に取り組んでいたように見えるかもしれない。しかし実際には士族間には大きく分けて二つの身分格差による対立が深く潜在していた。

一つは久光を取り巻く門閥や上級士族よりなる上士と、西郷、大久保などが属していた下級士族等を中心とする城下士の間の確執である。もう一つは城下士と、それ以下の身分である郷士、与力、足軽との間のそれである。栗原隆一の著に従

って、廃藩置県で特権を失った不平士士達の城下士西郷一派に対する抗議を見てみよう。

上士グループは、斉興の後継者選びの際久光を支持したお由羅派並びに門閥派であり、久光を中心として公武合体を目標とし、廃藩置県で士族の特権が廃止されたことに不満を持ち続けた。その中には、西郷を中心とする薩摩軍が西南戦争に出陣する際、西郷と政府の私闘に過ぎないと冷ややかな視線を送った者もいた。

城下士グループは、後継者選びでは斉彬を支持した勢力で貧乏士族よりなり、倒幕を目標とし精忠組や私学校の主な構成員で、新政府で活躍して出世した薩摩人の大半は城下士出身である。

特権を失った久光を取り巻く門閥上士達は、事あるごとに西郷一派を攻撃した。久光の忠実な側近を任ずる奈良原．、海江田信義、中山尚之介、伊地知貞馨等も、藩制時代の私怨を込めてあの手この手で西郷一派を攻め立てた。伊地知貞馨は西郷が蛇蝎の如く嫌った男である。

事態を憂慮された明治天皇は西郷の身を案じられて、廃藩置県から一年目の明治五年七月彼を近衛都督・元帥そして陸軍大将に任命された。この措置は全国不平士族の鎮圧に権威を持たせるのが狙いであった。

折りしも巷では、薩摩門閥上士達が封建守旧族を自任する島津久光を擁して大挙上京し、西郷参議を暗殺して元の娑婆に戻すという噂が流れていたことにも拠る。

門閥守旧派にとって西郷は過去二回の遠島を受けた前科者であり、新政府の参議といっても一介の成り上がり者に過ぎない。その唾棄すべき男が参議、近衛都督、陸軍大将と文武の顕職を得るに至ってはもはや僭上の沙汰と言わねばならぬ。しかも彼は廃藩励行のみか、鹿児島県士族の禄制の特別優遇措置すら絶対認めないというではないか。

「ちぇすと！　叩っ斬るべし！」

と、激怒した彼等は明治六年春久光を擁し、県令大山綱良、県参議奈良原らを先頭に、二百五十人がちょんまげ姿に両刀を腰にさして颯爽と上京してきた。その目的は、新政府の政策に対する抗議や廃藩置県の張本人西郷とその後ろ盾になった薩摩出身近衛将校の問責等である。返答次第では刀の錆にしてくれんという意気込みが険しく吊り上った眉字に漲っていた。

幕末を再現したような反動デモに往き交う東京市民は驚いた。近衛の屯営は殺気を孕んだ異様な空気に包まれ、西郷危うしとみて部下の猛将達が押っ取り刀で駆けつけた。

近衛軍司令長官の篠原国幹は大山綱良、奈良原を別室に呼ぶと、爛々と輝く眼で見据え、「おはんら、国家の政策にお従いならんと打つ殺しもんど！」と大喝した。横から桐野利明がこれまた「打つ殺しもんど！」と凄い形相で睨みつけた。

大山と奈良原は拳銃を手にした青年将校に周囲を取り囲まれ、如何に彼等が示現流の達人でもこれには手出しの術がなく、おっかなびっくりで早々に帰郷した。

篠原国幹は薩摩の誇る軍人の一人であるので、少々脱線して説明する。西郷、大久保等明治維新の功労者が多数誕生した加治屋町の出身で、二十四歳のとき精忠組の一員として、有馬新七等と脱藩討幕を企てたが久光の鎮圧により失敗した（寺田屋事件）。

時を経て、彼は陸軍少将として近衛軍司令官を務めた。西郷の下野に伴い、退官して鹿児島に帰り私学校で青年子弟を養成した。西南戦争では薩摩軍の一番大隊長として陰面緋色の外套を羽織り白銀造りの太刀をかざし陣頭指揮に当ったが、狙撃されて戦死した。

西郷は彼の戦死の報に接すると声を上げて泣いたという。西南戦争の戦死者を祀った南州神社では、西郷を挟んで左手に桐野、右手に篠原の墓石が鎮座している。

篠原は血気盛んで人望の厚い薩摩隼人であるが、沈着冷静で無口で統率力抜群の軍人であった。それ故近衛司令長官を辞任するに当たっては、大久保利通はいうまでもなく明治天皇までこの逸材を引き止めようとしたが、それを振り切って西郷と行動を共にした。長州の将校達も彼の薩摩への帰郷を惜しんだといわれている。

千葉県に「習志野」なる地名がある。習志野市史によれば、その名の謂れは次の通りである。明治六年天覧大演習が行われた際、篠原少将の凛とした見事な統率振りに心を打たれた明治天皇が、「今後すべからく軍人は篠原を鑑として見習え」と仰せられた。この地を「篠原に習え」ということで「習篠原（ならしのはら）」と命名された。その後「習志野原」から変化して「習志野」と呼ぶようになったという。

《小松帯刀の跡目養子とお千賀との結婚》

斉彬は人材育成のため目をつけた優秀な若者約十人を小姓として身の回りにおいて自ら指導した。そのうちの一人が肝付尚五郎、後の小松帯刀である。

斉彬の特命で琉球に出張中の吉利藩主小松家二十八代清猷が客死した。彼は将来を嘱望された優秀な人物であった。斉彬は彼の死を悼むと同時に、跡継ぎがいないため小松家が取り潰しになることを心配して、肝付家三男尚五郎を小松家二十九代の跡目養子に推薦した。

尚五郎は二十二才の時清猷の妹お千賀（お近）と結婚することになった。

当時の武家の結婚は足入れ婚すなわち夫婦として五十日暮して気に入らなければ破談にするという方法であった。互いに気に入れば改めて正式に仲人を立てて結婚願いを提出し、許可されて初めて結婚が認められた。

お千賀は七才年上であったが、小松とは愛情こまやかで夫婦仲はよかったが、彼女には子供ができなかった。小松の死後、小松とお琴の間に生まれた二人の子供清直（安千代）と於須美を引き取り、清直を三十代小松家当主にした。

《小松帯刀とお琴の純愛》

小松は城代家老として天下国家のため東奔西走の毎日を送っていた。京都暮しが長かったので京都妻お琴（琴仙子）がいた。小松と彼女の出会いは、久光の長女貞姫が近衛家に輿入れした祝賀を兼ねて、祇園での公武合体派の忘年会の二次会であった。小松は前に座ったぽっちゃりした色白の美しい舞妓に一目惚れしてしまった。小松二十九才、お琴十六才の一八六三年の暮れのことであった。早速身請けして京都の邸に住まわせた。

お琴は洛南下久世村の百姓の娘であるが、学問芸事に優れ、和歌の道にも通じていた。勤皇の志も深く、一流の志士達の接待役も上手にこなした。お琴は一心に小松に仕え、彼女の広い芸妓仲間から多くの情報を得て彼に伝えた。小松とお琴は純粋に相思相愛の間柄で、二人の間に長男清直（安千代）、辰次郎（早世）、於須美の子供をもうけている。しかし小松が一八七〇年三十六才のとき病気で他界した。小松は長年ひどい足痛に侵されていたが、最近の究研では死因として肺結核が疑われている。彼が亡くなったときお琴は二十二才の若さであった。残される妻子のことを小松に頼まれていた五代友厚は、お琴と二人の子供を引き取り面倒を見た。小松の死から四年後の一八七四年（明治四年）お琴は二十六才で彼の後を追うようにして亡くなった。「私が死んだら、小松帯刀公の傍らに埋めてほしい」とのお琴の遺言により、日置市吉利の園林寺の小松家の墓地に葬られている。

小松が京都から鹿児島に帰るとき、別れを惜しんで互いに詠んだ歌がある。

小松帯刀

鳴渡る　雁の涙も　別れ路の
袂にかかる　心地こそすれ

琴　仙子

よもすがら　宇治の川風　みにしみて
共にききしや　思出づらむ

うちいずる　今日の名残りを　思いつつ
薩摩の海も　浅しとやせん

《西郷と愛加那》

奄美列島は薩摩藩士の流刑の地でもあった。お由羅騒動に連座して大島に重野安鐸、高崎正風、桂武久ほか二人、喜界島に大久保利通の父利世、村田新八ほか三人、徳之島に四人、沖永良部島に西郷隆盛が流されている。

西郷の場合、一回目は一八五九年大島に島流しされ三年服役している。このときは僧月照と入水し西郷だけ助かった事件で、幕府の追及を避けるため菊池源吾という名で潜居している。

彼は大島から帰藩後、「九州の状勢を探り下関で到着を待て」という久光の命令に背いて上洛した。尊攘派が久光と共に討幕挙兵を目的として京に続々と集結中との情報に接し、取り返しのつかない事態の発生が予想されたので、それを止めるため久光の到着を待たず上洛したのである。

取り巻き連中が久光に志士達から聞いた話として、「西郷が薩摩兵と共に上洛するので活動家達が京に続々と集結し盛り上がっている」と報告した。久光は西郷が我が命令を無視してテロ活動を扇動していると受け取ってしまった。実際には京都で西郷は、有馬新七等精忠組の面々や諸国の浪士達が決起しようとするのを必死で説得していたのである。

命令に逆らったとして、西郷に対する久光の激怒は収まらず、厳罰必死となったことを知った久光の側近である大久保利通は、西郷を兵庫の人気の無い海岸に呼び出して「殿の怒りは解けない。二人で刺し違えて死のう」と持ちかけた。西郷は「二人とも死んだら薩摩と日本の大事に誰が取り組むのだ。天下国家のため生き抜こう。」と逆に大久保を説得した。

斯くして西郷は今度は一八六二年六月徳之島に流され三カ月牢居後、同年九月に沖永良部島に流刑に処されたが、一八六四年二月に放免されて帰藩した。当時の薩摩の掟では沖永良部島への流罪は死刑に次ぐ重罪なので、彼は一生この島で人生を送ることになると観念したという。

西郷はどの島においても評判がよく、村人役人が皆暖かく見守っている。彼は大島で人間の幅が一段と大きく成長した。人徳があり、実りある数々の出会いにも恵まれた。藩の推薦で中国に留学した経歴を持つ通訳官である岡島進儀宅に通って、漢詩の指導を受けている。彼の漢詩の素養はこの島で培われたといえる。西郷のもとにはいつも子供達が集まり、彼等は西郷から「人の道」を教えられた。

清廉潔白で正義感の強い藩の役人得藤長も、色々西郷の面倒をみて「田畑」の家に預けるように取り計らっている。西郷は得藤長と「田畑」家十八代当主の弟に強く勧められて、十七代当主の娘である愛加那を島妻として迎えた。「この島にいつまでもおられる身ではごわはん。命があればすぐ出立しなければないもはん。結婚しても藩の掟で鹿児島に連れて帰ることはできもはん。相手が気の毒じゃっで嫁を貰うわけにはいっもはん」と固く断ったが、愛加那の魅力に魂を奪われて大西郷もついに陥落した。

結婚したとき西郷は三十三才、愛加那は二十五才。彼女は龍愛子とも田畑愛子

とも呼ばれている。また親切で明るい性質の美人であったといわれている。やがて長男菊次郎、長女菊草（菊子）が生まれ、彼の人生では最も充実した日々の二年間であったと思われる。夫婦仲は大変良かったらしい。西郷は客人がいても彼女に寄り添い愛撫を惜しまなかったので、客は目のやり場に困ったと伝えられている。

長男は九才で鹿児島の西郷家に引き取られ、十七才のとき西南戦争に従軍し片足を失ったが、後年は京都市長を務めている。菊草は十四歳まで母の下で育てられ、その後鹿児島に出てきて西郷の従兄弟である大山巌の弟に嫁いでいる。

子供の名前に「菊」の字がついているのは何故だろうか。西郷家は元禄時代まで熊本県菊池郡七城村西郷の在であり、南朝の忠臣菊池武光の末裔と言われている。西郷は自分のルーツの「菊池」に愛着があったので「菊」の名を付けたといわれている。

大西郷の微笑ましい逸話をひとつ紹介する。斉彬の男子はいずれも夭逝した。当時薩摩では久光派が呪詛をもって呪い殺しているという噂が広く流れていた。そこで西郷は一心に斉彬の子息が健やかに成長するように、「不犯の誓い」を立てたと友人に知らせた。しかし、健気な彼女の魅力に勝てず、〝恥ずかしながら子供が出来ました。〟と書状で告白している。

西郷が大島を去ったとき、愛加那が詠んだ胸を締め付けられるような歌がある。

「行きゃんかにゃ加那
吾きゃ事忘れて行きゃんかにゃ加那
うつ立ちゃ　うつちゃが行き苦しや」

（行ってしまうのか愛する人よ
自分のことを忘れていってしまうのか
旅立つけれども　やはり引き戻したい）

（木原三郎　「愛加那記」）

愛加那と西郷は、三度目の流刑地沖永良部島からの帰路大島で四日間だけ会えたのが永遠の別れとなった。長男菊次郎は二度帰郷して愛加那に会っている。愛加那は一九〇二年八月農作業中に脳溢血のため畑で倒れ、若くして夫と二人の子供と別離した寂しい六十五年の人生に別れを告げた。

《西郷どんの逸話》

以下の話は石原貫一郎の「西郷隆盛に学ぶ」から引用したものである。

昭和二年二月一日付東京の国民新聞の「老スリの告白」によると、四人のスリ仲間「角山の平次」、「品川の鉄」、「若衆の金太」、「巾着屋の豊」が酒を飲みながら自慢話をしていた。その折陸軍大将西郷隆盛の金時計を掏ったものに一杯おごることで賭けが成立した。

薩摩絣に兵児帯をして銀座を下駄で歩く西郷さん。兵児帯からぶら下がる金時計。二人は失敗した。三人目の「若衆の金太」の右腕に金時計が握られていた。が、その瞬間お供の書生に捕まり、拳骨が振り上げられた。「待て、打たんでもよか。こっちに来い。」と西郷どんの一声。金太はすし屋の二階に連れ込まれた。

金太はスリの賭け事になった顛末を白状した。それを聞いた西郷どんは大笑いし、「オイどんの弟西郷従道が浜町にいる。金がなくなったらそこに行け。悪か事をするもんじゃなか。」と説教された。そして旨いすしをご馳走になり、太政官紙幣を二枚与えられ、まるで夢心地で引き下がった。

この話はたちまち仲間に広がり、利け者になった。晩年隠居した金太は「あれからというものは足を洗い、今でもあの、上野の西郷さんの銅像の下を歩くたびに、大水をかけられたようにヒャッとして当時のことを思い起こして冷汗をかきます。そして、まことに偉い方で、あの旦那のありがたさをしみじみ思い起こします。」と懺悔したそうである。

西郷さんは、目も大きく体も大きく、腹も大きかったが、股間の持ちものも大きく、面白い話が残っている。彼は沖永良部島に島流しされた時に蚊の媒介による風土病、フィラリアによる陰嚢水腫に罹ってしまったのである。

西南の役出陣のとき冬は冷え込むからと、桐野利秋が西郷さんのためにわざわざ兎の毛皮で押さえ袋を作らせたという話がある。

その後可愛岳の重囲を突破して三田井村に脱出して坂本の専光寺に泊まっていた時、そのキン隠しを置き忘れて出立した。それを寺の住職が見つけて、「西郷さんのものなら、たとい何であっても尊いもの」として頂戴し、自分の煙草入れとして大切に持っていたという。

征韓論後帰郷して武村の邸に起居していた時のこと、田上の川に腰まで浸かって魚取りをしていた。股間の逸物をぶらぶらさせているのを、通りがかりの百姓婆さんがたまたま見て、「旦那さあ、こりゃ太とおじゃんどなあ」（旦那さん、これはでかいですね）と言うと、翁もにっこりして、「おお、お膳の代わりにならい」（その通りだ。お膳の代わりにもなる）と答えたよし。

また西郷さんは晩年よく書をかかれたので、座席に広い紙を広げ大筆を持って中腰に踏みまたがり雄渾な揮毫をしておられた時、縁側の縁にあごをのせて下から見上げていた子供達がたまたまその逸物を見て、「あーら、おじさんのキンゴロ（タマ）は太かわい」と目を見張ると、西郷さんも笑って、「わいどんに、引っちぎってやろうかい」（わいどん＝お前たち）とからかわれたそうである。日当山温泉や大島でもそんな話が多い。

《薩摩切子》

薩摩の工芸品の一つに薩摩切子がある。それはボヘミアや英国のカット・ガラスと並び称される程美しいガラスの工芸品である。将軍家や諸大名に贈答品として献上され、篤姫の嫁入りの支度にも加えられている。大名等からの注文で収益も上げている。

薩摩のガラス製造は、薬ビン製造を目的として一八四六年に第十藩主斉興によって四本亀次郎を江戸から招聘して始まった。

薩摩切子の製作は一八五一年に第十一藩主斉彬によって開始された。彼は殖産興業こそ日本の進むべき道であると考え、将来薩摩切子を輸出することを目標に掲げて、藩内外の蘭学者に各種の色ガラスや耐酸性のある硬質ガラスの調査研究を命じている。

ガラス製造は困難を極めたが、数年に亘る研究と数百回の実験を繰り返して紅ガラスの製造に成功した。紅ガラスのほか藍色、青色、紫色、緑色、黄色、白色のガラスの製造も可能となった。

薩摩が誇る紅色ガラスには二種類ある。金を混ぜてルビー色に発色させる透明なガラスと、酸化銅を加えて作る殷紅色（暗赤色）で透明度の低いガラスである。

切子はガラスを削って文様を浮かび上がらせたカット・ガラスのことである。これには江戸切子と薩摩切子がある。江戸切子は透明なガラスに細工したもの、薩摩切子は透明なクリスタル・ガラスの上に色ガラスを厚く被せて、その色ガラス部分をカットして文様を浮かび上がらせたものである。色ガラスを浅い角度でカットすることにより、切子面に色のグラデーションが生じる。これは薩摩切子の特徴であり、「ぼかし」と呼ばれる。

薩摩切子は当時最先端技術を有する日本唯一のコンビナートである尚古集成館で製作された。最盛時二百名が働いていたが、斉彬が死去すると財政切り詰めのため二十名（職人は五名）に削減された。

工場は薩英戦争時直撃弾を受けて炎上した。薩摩切子は二十年足らずの短い期間しか製造されず明治初頭で途絶えた。薩英戦争後の和平後英国のパークス公使一行が招待されて薩摩にやってきた時、尚古集成館で薩摩切子見てその出来栄えに感嘆の声を上げている。

薩摩切子は一九八五年に復刻生産されるようになり、現在島津興業等で製作されている。

明治政府は板ガラスの製造に関し、英国式の円筒形に吹いた筒を切り開いて作る方法を採用した。そのため三十年間もまともな板ガラスを製造できず、工業近代化に大きな遅れと禍根を残すことになった。しかし、驚くべきことに薩摩では、当時フランス式（鋳造圧延方式）の製法で板ガラスを作っており、現在三十㎝×三十㎝×二２㎝サイズのものが残っているという。

《一寸御免》

司馬遼太郎によれば、田原坂にある「弾痕の家」といわれる作田家に、薩摩軍が残した遺留品のなかに孟宗竹でできた焼酎入れがある。外皮の一部を削って墨で「一寸御免」と書かれている。問題はその太さである。何と直径は四十㎝もある。

これを見た司馬遼太郎は、薩摩のあちこちでこのサイズの孟宗竹が残っているか聞いて回ったそうであるが、今はないとのこと。江戸や明治初期には電信柱並の太さの大竹が存在したことになる。一体その高さは何ｍあったのだろうか。

《Satsuma なる語は》

最後に、サツマという語は外国ではいかに・・・。

Oxford 英語辞典よれば、satsuma の説明として一・日本の地域名、二・温州みかん、三・薩摩焼、とある。

元駐日英国大使コータツツイによれば、英国の青空市場でみかんのことを「サツマ」と呼んでいるそうである。

一八七〇年代に薩摩（日本）の温州みかんが米国に渡り、これに因んで命名されたsatsuma という地名がフロリダ、アラバマ、ルイジアナの各州に存在している。

温州みかんは一般的には mandalin orange の名の方が広く通用しているが、satsuma、satsuma mandarin という名でも知られている。英国の小説ハリーポッターには、「satsuma の皮をむきながら・・」という文章があるそうである。

米国の HP によれば、satsuma という名のついた以下の商品がある。

Satsuma mandarin・・・サツマ みかん
Satsuma body shower gel・・・サツマ ボディ シャンプー
Satsuma creamy lotion・・・サツマ クリーム ローション
Porcelain fishbowl planter-Satsuma style・・・
薩摩焼スタイルの室内用栽培容器